

月刊
オパーリン王国
2012年
3月号

編集・発行人
オパーリン

序文

本号で月オパは創刊半年を迎えた。半年、短いようで長い。僕自身、こんなに続くとは思ってもしなかった。そして、僕（オパーリン）、東町健太氏、弦楽器イルカ氏、多良鼓氏、鶴首氏、と五人の執筆者が文章を発表する雑誌に成長した。もちろんこれも創造だにできなかったことである。月オパという泥舟と一緒に乗り込んでくれた4人の勇敢な作家の方々に心から感謝している。

誰もがはばからずに発言できる王国の実現は一向にやっこないように思える。が、その実現に着々と迫っているようにも思える。実はそんなことはどうでもいいとさえも思う、楽しいからそれでいいと。読者がいるのかいないのか分からないが、読んでくれている人はありがとう。「隠れキリシタン」ならぬ「隠れオパーリン王国民」として、これからも月オパを読んでもくれるとうれしい。

ここは通過点に過ぎない。月オパはこれからも邁進していく。次の目標は「一年」に設定しようか、半年後だな。半年後の自分なんて想像もできない。でもまあ、想像できなくても一向に問題は無いので、一号一号、心血注いで作って行けばいいと思う。

とゴタクはこれくらいにして、少し本号の内容を紹介しよう。

本号から、新連載が二つスタートする。一つは弦楽器イルカ氏の連載小説である。この小説は僕が本誌への執筆を依頼した当初からイルカ氏が掲載を約束してくれていたものだ。今月号のトップバッターを努めてもらうことにした。もう一つは東町健太氏と僕の合同企画「その「声」は「誰」の声？」。とある新聞の投稿者の作品を我々「その「声」は「誰」の声委員会（略称、誰の声委員会）」が勝手に表彰する、という企画だ。来月以降も毎月表彰しようと思っている。

多良鼓氏は科学と政治について考察するエッセイを書ってくれた。僕も科学を志すべき学生の端くれとして（風上にも置けない輩だとは重々自覚しているが）常々考えていたテーマである。弦楽器イルカ氏との連載企画「おまなや」は第三回、今回はあの大物芸人の悩みを解決した。鶴首氏は今回で二回目。なんと小説を書ってくれた。ので、新コーナーを作った。彼の独特の世界観がまた一つバールを脱いだのではないかと思う。今後（もし書いてくれるのならば）彼の世界がどのように発展し、提示されていくのか待ち遠しい。

では、月刊オパーリン王国2012年3月号、お楽しみあれ。

（2012年3月24日）

新連載

不定期連載小説 第一回

『四月に見る夢 I』

執筆者 弦楽器イルカ

この物語が、震災で生まれた瓦礫の一つとしてあなたに焼かれ、弔われることを祈って。

○

〈遺書〉

死にたくないと思っている。死の恐怖だけじゃなく。僕はまだ死にたくない。遺書なんて書きたくない。まだ僕には知りたいことがいくつかあって、会いたい人が幾人かいて、やりたいことが山ほどあるのだ。僕自身にしかできないやつだ。他の誰にもやらせたくないやつだ。これから僕がやるべきことなのだ。僕はまだ十七で、僕はまだ何もしてない。

完全に空白の三年間。死を直前に迎えた人間の時間にしてはあまりにも情けなさすぎるし、僕はまだこれからなのだ。僕が今までしてきたことは、他人に迷惑をかけることだけだったのだ。言い訳はしない。だからこそこれからなのだ。なのに。だったのに。

なぜだ、なぜ僕は死ぬ。なぜ僕は死ぬんだ。僕が何をしたというんだ。死は怖い。死にたくない。なぜだ。なぜ僕は生まれた。このまま何もせずに死んでいくためか。そのために僕は生まれたのか。そんなの誰が信じるんだ？ 信じられるもんか。

スイッチを切れば不安になる。書きたいことが山ほど浮かぶ。

でも僕は手を切らねばならないのだ。僕の生と同じように。

●

三度読み返して、やっと少しすっきりしたような気がした・おかしい話だ・自分の遺書を推敲するなんて・でもいいんだ・もうどうせ作家になんてなれないのだから……

電気スタンドを消した・真っ暗闇だ・右手を伸ばしてカーテンに触れ、隙間から少し外を・いつもの雪が降っている・遠くに大きなあの黒い影・見慣れた瓦礫の山が見えた・窓から離れ、あろうはずのベッドに飛び込む・ばほっ・枕に顔を押しつけてみた・

『その日』が来てから一年が経った・あれからずっと、誰とも話をしていない・家の電話もつながらないし、ポケベルも持ってない・何もかもダメになってしまったけど、何が悪かったってワケではないのだ・『その時』がやってきて人間が死ぬだけだ・しょうがないさ・人間がいなければって誰もが思ってたんだから・ただ……

僕はまだ、何もしてない・

泣きたかったし、目は潤んできたけど泣けなかった・人間ってのは・僕はまだ生きてるし僕だけは大丈夫なんじゃないかとかって思ってるんだ・死については考え過ぎていて、もう何がなんだかよくわからない・でも、一人だけで生き続けたくなんてない・たぶん……

布団をまさぐって端っこから中に入った・冷たかった・大丈夫、そのうち暖かくなるさ・うつぶせにもぐり込んだ布団の中でふと、僕はもう幽霊かもしれないなんて考えが浮かぶ・僕はただのサンプルで、データを取られるために生きているんじゃないかなんて・世界中の人々に貢献するデータ・それが素晴らしく有意義な生だって思い込もうとしてる・

この世界で一番大切なのは命だなんて、そんなのはただのキレイごと・嘘っぱちで・この瞬間にもたくさんの人が死んでるし・僕の命よりデータの方が大切な人々がいる・それだけは間違いないんだ・だって本当に安全なら・何も起こらないなら、そもそもデータなんて取る必要はないのだから・危険かどうか調べられるための、幽霊の町・

そこでふと、あの写真・衛星から撮った、『その日』の地上の写真を思い出した・

それはいつもと同じ場所、同じ時間の風景で――

降り積もる雪と――

音もなく白く変色していく山や、町並みと――

家々の屋根や道路や、道路に倒れているたくさんの人々と――

それはあるいは、いつもとそれほど変わりはないのかもしれない・

ただ、死んでるだけだ・

彼らの中で、誰がこんな死を予期したのだろうか・彼らは苦しんだのだろうか・悩んだのだろうか・そして、憎んだのだろうか・『その時』を・理由のない『その時』の到来を・あるいは、そんな暇さえなかったのだろうか・『その時』はどうやって、どうしてやって来るのだろうか……

犬・

そう、犬だ・人が倒れているその脇で今も吠え続けているだろう犬・ついさっきまで一緒に走っていた飼い主に鼻面をすり寄せその首筋を舐め、そして噛みつき食べる犬・または繋がれた首輪を恨めしく思い続け死んでいくであろう犬・うつ伏せに、仰向けに折り重なる人間たちの脇で、争い、喰らい、交尾し続ける犬・

あのニュースの後で、いったいどれくらいの飼い犬が殺されたんだろう・

まってね・すぐいくからね……

イヤな気持ちだ・

ものすごく、ものすごくイヤな気持ちだ・眠れそうにないと思う・でも寝なきゃ……

また、夢で会えるかな・

それよりも寝なきゃ・眠れないことはわかっていた・この一年ずっと・起きてても夢の中にいる

ようで・今まではこんなこと……

今までだって？ ふふ・今まで？

こんなときはどうすればいいだろう・いつも思うことだけど・

星か……

星か・星も悪くない、一年前まではいつも夜なのに町の方に照明の白く薄ぼけた光が見えるだけで・それがどうにも昼間の余韻みたいに見えて仕方がなくて・こんな田舎でも随分と星の数が減ってたもんだけど・あるいはそれは、人が本当に昼間を蘇らせようと必死で照明を灯していたからなのかもしれない・星か、星も悪くない・でもねなきや……

でんきがないからほしもきれいだよ……

でも、ねなきや……

パチン。

○

私は、少年の夢の中で目を覚ます。

「ねえ、起きて」

彼女が私の眠りを覚ます。

「思い出して。あなたは、あの少年の現在。あの瓦礫の町に住む少年は、十代の頃のあなた。でしょ？」

そうかもしれない、と私は思う。瓦礫の町……

「全国にばら撒くのをやめて、人がいなくなったあの場所に送られた、瓦礫の町。あの少年はそこに一人に残ってるの」

なぜ人がいなくなったんだろう？

「逃げたから。または逃げ遅れて死んでしまったから。死んだ人の半分は時砂に汚染されたの。雪みたいにキラキラしてとても綺麗な白い砂よ。でも、あれに触れるとみんな死んでしまう。八日、三十年、二万四千年間、時砂は消滅するまで、触れる物の時間を吸い上げて奪うから。あと半分の人が死んだ理由はあたしにもわからない。瓦礫が送られたと同時に、なぜか死んでしまったの」

瓦礫はなぜ送られた？

「瓦礫は過去だから。過去が未来を侵食するのは許されないから。未来に誰かが大きな病気を患った時、瓦礫を受け入れたせいに違いないって、自分を責めて後悔する人が少しでもいなくなるように。過去が未来を縛らないように、あの場所へ瓦礫を集めたの」

あの少年は？ なぜまだ残っている？

「なぜ逃げなくちゃいけないの？ ただそこにいるだけなのに。世界中の誰しものが、ただその場所にいるだけなのに、どうして逃げる人と逃げなくていい人がいるのかしら？ そんな所に踏みとどまっちゃダメだって責める人と、居続ける理由をわざわざ言い訳しなきゃいけない人がいるなんて。どうして？ それがわからないから、少年は逃げないの。逃げずに物語を書いてる。何度書き直しても完成しなかった物語。覚えてる？」

私は思い出す。十代の頃、私はワープロに向かって物語を書いていた。

あの物語は完成しなかったんだ。今じゃもう、書く意味なんてない気がする。

「どうして？」

物語の速度では現実には追いつかないから。現実のスピードがあまりにも早すぎて、物語が終わる頃には現実は全く別の物に変化しているから。現実逃避のために、物語を利用したくないから。

「でもこうやって、あなたは続きを書いている。今こそ現実を超える物語が書けるんじゃないかって。ねえ、取引をしましょう。物語の続きを教えてあげる」

取引？

「あの少年を殺しなさい。あの少年が最後なの。この世界では報道されなければ知らなかったことにできる。誰も知らなければなかったことになるから。だからあなたがあの少年を殺せば、瓦礫は消えるの。ねえ。あたしの望みは、これから描かれる全ての物語を瓦礫から解放することなの。この世界から『その日』の記憶を消して、未来を憂いなく過ごすために。あなたが原罪を背負えば誰もが救われるのよ」

だとしたら、人々を殺したのは、キミか？

「違うわ。殺したのはあたしじゃない。あなたのような未来の人間が、過去の自分たちを殺したの。将来を再開発するために、過去の遺物を取り壊しただけ。あと瓦礫の町から立ち退きしないのは、あの少年だけなの。ねえ、あの少年を殺して世界を元に戻しましょう。誰もがそうやって日常を取り戻しているわ。そこに後ろめたさを感じる必要はないのよ」

私にはわからない。何も。

「ねえ。深刻に考えないで。ただのフィクションよ。世界の片隅で起こる誰も気づかない小さな殺人。現実には誰も血を流さない。もうわかってるでしょ。この物語が現実を超えることをあなたは願っている。いつだって物語を追いかけて、どう書くかにしか興味の持てないあなたが考えたのよ。あの少年が書いた物語の続きを、現在のあなたが引き継ぐの」

わからない。第一どうやって。殺す？

「大丈夫。あたしがあの少年をおびき寄せるから。時砂を避けて瓦礫の町から逃げる道を知っているの。あなたは途中で待ち伏せして、少年をこのナイフで殺せばいい。未来の自分にしか、過去の自分は殺せないのよ」

私はナイフを握り締め、深い眠気に誘われてゆっくりと目を閉じる。

クリック。

新連載第一回

『その「声」は「誰」の声？』

執筆者 東町健太、オパーリン

・企画趣旨

とある大新聞に日がな寄せられる読者の「声」。その声は一体誰の声なのか？何を代弁しているのか？国民、労働者、女性、弱者、子供、はたまた単に「我々」という曖昧な共同体意識か？気になって読んでみれば、これまたびっくり、とんでもない・・・、いやいや思わず溜息がこぼれるほどのすばらしき投稿ばかり。

ということで我々オパーリン王国では東町健太氏を委員長にすえ、「『その「声」は「誰」の声？』委員会」を結成した。当委員会では毎月、これらの投稿の中から特に秀でた投稿について勝手に表彰し、講評を行うこととする。

・『その「声」は「誰」の声？』委員会 メンバー紹介

選考委員長 東町健太

選考副委員長 オパーリン

・2012年3月度 結果発表

〈大賞〉「子ども手当ては息子の旅に」

(主婦 女性 48才)

「子ども手当て」が支給される前は、道でホームレスの方を見かけては「果たして私たちが本当に頂いていいか」と悩んでいた主婦です。

中3の息子は国立の一貫校なので、受験料も塾代もかからず、毎朝お弁当作りに励み、勉強している時は後ろから喝を入れ、お金をかけずにやって来ました。

当初、手当はおかず代や貯蓄にと考えていたのですか、主人の「使わないと意味がない」という意見に賛同し、すべて旅費に使うことにしました。昨年、息子は名古屋、大分、沖縄、グアムなどを旅し、心も体も成長したようです。手当は大いに役に立ちました。ただ私としては手当が続くなら子どものためにも、景気回復のためにも街の商品券、図書カードなどにしたほうがいいと思います。

〈講評〉

・東町健太（選考委員長）

見事、の一言につきる。書き出しがまず秀逸だ。ホームレス、という単語が出た時点で例えば私のような凡人であれば福祉関連の話題に入ってしまうだろう。しかし著者の非凡さはそんなあ

りきたりな考え方をしないところにある。「本当に頂いていいか」と悩むならば当然、ホームレス支援団体などに寄付をしたりするのかと思いきや、まさか「国立の一貫校に通う」恵まれた息子の旅費になるという驚きの展開。「その日食べるパンをゴミ箱から拾うホームレス」と「名古屋で揚げたてのエビフライに舌鼓を打つ若者」、「都会の雑踏の中で必死に生きるホームレスと大分の豊かな自然を満喫する若者」、「長い路上生活で真っ黒に汚れてしまったホームレスとグアムや沖縄の美しい海で真っ黒に日焼けする若者」、このような対比をいやでも読者は連想させられるだろう。こんなに短い文章で現代社会の貧富の格差を鮮やかに描写した筆者の才能は本物だ。

そして素晴らしいのは「商品券」、「図書カード」といった一見なげやりにも見える結論部分だ。この結論の効果で最初に提示されたホームレスの姿は跡形もなく消えうせる。筆者は、ホームレスや社会的弱者のことなんて口では奇麗事を言っても結局はポーズだけで真実は誰も彼らのことになど関心を払っていない、という現代を生きる人々の欺瞞を、その文体をもってしてするどく批判しているのだ。

天才、と呼ばざるをえない才能との出会いに私は感激している。芥川賞受賞に値する。

・オパーリン（選考副委員長）

「人は何故文章を書くのか」について、一読してその認識を根底から覆される思いがした。「筆者は何が伝えたかったのだろうか」という読み手の安易な理解を激しく拒絶する筆者の姿勢に作家としてのプライドを感じる。

見栄、嘘、欺瞞、社会矛盾、偽善、虚無。たった300字あまりのこの掌編には、人間を人間たらしめるありとあらゆる要素が織り込まれている。星新一以来の圧倒的な才能の登場に心からの賛辞を送りたい。

〈佳作〉「話し合い解散は裏切り行為だ」

（主婦 女性 48才）

本紙をはじめ、報道各社は先月末に野田佳彦首相と谷垣禎一自民党総裁が極秘会談し、「話し合い解散」についても意見交換した模様だと報じている。事実であれば非常にショックだ。

前回の衆院選では自民党に嫌気がさし、民主党に期待して投票した国民は多い。ところが政権交代後の現政権はマニフェストを次々に破っていたずらに国民負担を増やし、逆にマニフェストにはない消費税増税を持ち出した。このような不誠実さへの国民の批判が参院選でねじれを生じさせ、現内閣の支持率も30%を切るところまで落ちた。

だが自民党にも国民の支持は集まっていない。同じ消費税増税路線をとる一方で評価できるような政策は何も掲げず、党自体の改革も進んでいないためだろう。この上、「話し合い解散」などするならば、両党共に国民無視の裏切り行為であり、絶対に許せない。

ますます国民の政治不信は強まるに違いない。

〈講評〉

・東町健太（選考委員長）

「人それぞれ」という言葉がある。私の嫌いな言葉の一つであるが、筆者は私以上にその言葉

を嫌っているのだと思われる。この文章の中には「国民」という単語が都合6回もでてくる。「国民」を主語にして持論を語る筆者の文章は「私の意見は国民の意見。私と違う意見をもつ国民なんかいるわけがない！」という力強さにあふれている。前回の衆院選でも自民党に期待して投票した人もいるだろうし、参院選において民主党に期待の一票を投じた人もいるだろうが、そんな人の存在など無視するという非常にたくましい論調だ。「評価できるような政策は何も掲げず」という箇所があるが、もちろんこの箇所の主語は筆者の中にのみ存在している「国民」に違いない。筆者はただの一介の主婦ではない。さまざまな考えをもつ、一億を超える日本国民の全ての声を代表するスペシャルな一介の主婦なのだ。

このような思考回路は一朝一夕にできあがるものではない。おそらく筆者は普段から、例えば自分の乗った電車の暖房が暑ければ駅員に「暖房暑すぎるわよ！国民は怒っているわ！」と怒り、隣家の飼い犬の鳴き声がうるさければ「おたくの犬は国民の敵よっ！！」と怒鳴り込むなどの努力を続けているにちがいない。その努力に敬意を表して佳作とさせていただいた。

・オパーリン（選考副委員長）

筆者は類まれなる隠喩の使い手である。「ひょっとするとこの愚劣極まりない主張は、筆者の本音なんじゃないか」と見紛う程に見事な隠喩である。とりあえず文句しか言わないゴミ、そのくせ「対案」を何一つ提示することなく「そんなものはあんた等が考えなさいよ、当然でしょ。私たち「国民」の血税で飯食ってんだから。」と言わんばかりのふてぶてしいゴミ。徹底してそんなゴミになりきることで、筆者は「民意」や「国民」という顔の無い主語を傘にしてものを言うことの愚かさを強烈に皮肉っている。筆者には今後も、その卓越した技巧にさらなる磨きをかけてもらいたい。ただ、できれば、読者が隠喩だと気付くことができる程度にヒントをいただけたらと思う。

〈佳作〉「若者よ、現状に満足せず怒れ」

（無職 男性 65才）

内閣府の国民生活に関する世論調査によると、2010年時点で20代の男性の66%、女性の75%が「現在の生活に満足」と感じているという。この調査結果を取り上げたテレビ番組で、年配の女性会社社長が、自分たちの若い頃は女性にとっていかに厳しく難儀な社会であったか、また、日本人がみな、よりよい暮らしを求めていかに働いてきたか、を指摘し、現状に満足する若者たちを理解できないと話していた。同感だ。

物質的に豊かな社会で育ったいまの若者にすれば、生きていくのに不自由はないし、政治や社会に関心を持たないために不満も感じないのだろう。40年前、20代の私たちサラリーマンは、低賃金長時間労働反対を叫び、週休2日や賃上げ、その他待遇改善を自ら勝ち取ってきた。同時に弱者切り捨ての政治や政治家の汚職、公害問題などにも怒りの声をあげてきた。それを支えたのは「現状を変えたい」「今日より明日の暮らしをよりよくしたい」という夢と希望だった。労組もストライキも知らぬ若者に伝えたい。社会の不正、国の不誠実、企業の不実、そんなことに常に目を向け「怒れ」と。

〈講評〉

・東町健太（選考委員長）

筆者は65歳である。その年代の方々がこの文章にあるような苦勞をなさって今日の日本がある。現在の日本を作り上げたのは彼らであるといってもいいだろう。しかし現在の日本の若者の状況に筆者は憂いを感じ、「理解できない」と語る。

しかし「理解できない」なりに現代の若者を分析しようとする姿勢には感服させられる。いまの若者は「生きていくのに不自由はな」く、「政治や社会に関心を持たない」と「理解できない」はずの若者について言及し、「労組もストライキも知らない」と断定するその姿勢。私のような下賤の者の目でまわりを見ると、何の不自由もなく生きて、政治や社会に関心がなく、労組もストライキも知らない若者など見たことはないのだが、筆者のような現代の日本の土台を築き上げた立派な方の慧眼にはそうは映らないらしい。

ブータンという国がある。この国は国民の97%が「いまの生活が幸せ」と答えるふざけた国らしい。筆者はこのような国へ行き、その幸せな国民に労組やストライキを教え、「怒れ」と伝えてほしい。ブータンを、国民の97%が「今の生活が不満」と答え、頻発するストライキで国民生活が崩壊し、誰も彼もが常に怒っている、そんなすばらしい国に生まれかわらせてほしいものだ。

・オパーリン（選考副委員長）

論理の飛躍、主張の偏り、そんな批判を微塵も恐れぬ描写の筆圧から筆者の覚悟がビンビンと伝わってきた。過ちや批判を恐れるあまりに無難なことしか言えなくなってしまう軟弱な現代の若者への「叱咤激励」は、これまで「労働者の代表」として怒り狂ってこられた筆者の人生がその文章から滲み出ることによって迫力、説得力を増している。ただ、若者全員が現状に満足しているわけではないこと、過去の人がその現状を「よりよく」した結果が2012年の日本の惨状、あ、いや現状なのであるということだけは言い添えておきたい。

連載（不定期）第三回

お前、悩んでんだろ?

題字：弦楽器イルカ

『お前、悩んでんだろ?』 企画趣旨

悩み多き（と勝手に判断した）芸能人等のお悩みを、（頼まれてもいないのに）自称伝道師※が愛情を持ってときに厳しく解決するコーナー。

※伝道師（でんどうし） 1、キリスト教の聖公会・プロテスタントの教職の一つ。2、転じて、他人に何事かを熱心に勧める人。

今月の被害者

M本H志

略歴（ウィキペディアより抜粋）

1963年9月8日生（48歳）。日本のお笑い芸人、エッセイスト、作詞家、映画監督。お笑いコンビ「ダウンタウン」のボケ担当。「ダウンタウンのガキの使いやあらへんで!!」、「ダウンタウンのゴッツええ感じ」、「人志松本のすべらない話」、「リンカーン」等で知られる日本を代表するお笑い芸人である。よしもとクリエイティブ・エージェンシー（東京）所属。愛称は「松ちゃん」。既婚であり、1児の父。左利き。

伝道師①：弦楽器イルカのススメ

例えば最近ツイッターはバカ発見器って言われてるけど、芸能人のは趣味じゃなくて完全な営業活動でしょ？ お客さんがわざわざフォローしてくれるありがたい広告じゃない。そこはフツの営業さんだってもっと気を使うとこよ。フツのOLさんだって「無責任」って評判を怖がってデキ婚を諦めたり、自重するもんよ。それが芸能界ときたら、才能ある人でさえちやほやされたら己を見失うのよね。

例えばサッカーの中田とか、あの松ちゃんもそうよ。親しみを込めて松ちゃんと呼ばせてもらうけど、松尾スズキやナンシー関だってあんたには一目置いてた。それがMHK、松本人志のコント。「笑いに命を売った」って煽りまくったけど、回を追うごとに笑えなかったし、もっと面白くできるだろうって歯がゆかった。あと現場の雰囲気も痛々しくみえた。みんな「面白いですわ」って気を使ってる感じ。恨みを買ってまで天才って自負してた松ちゃんなのに、今じゃ「何もかも理解されない俺」って退屈な芸能人になってる。

公平に批評するため具体例を出すけど、例えば影絵英会話ネタ、本物のNHKがパロディやったことは凄いけど、ゲロしたり気色悪い動きだけじゃ大人は爆笑できないわ。「影絵で英語教材なのにここまでやるか」って笑わせたいなら、昼メロっぽい嫁姑問題とか火サス・土ワイ並のドロドロ不倫愛憎殺人復讐劇とかを際どい性描写入れてやってほしかった。云わばトカゲのおっさんの影絵版よ。あと特撮コントは突っ込みがないとオチないし長い。更に全体通してアドリブの切れが悪かった。

以上踏まえて結論だけど、解決法は割と簡単よ。MHKの中で笑えたコントの一つが、浜ちゃんと出てたヤツ。松ちゃんの退屈な過剰さを浜ちゃんが笑いの地平に軟着陸させてくれたの。だから、M松本、H浜田、Kコントにして磨きをかけたら、尻切れトンボな『ごつつ』の続きがまた観れるんじゃないかな。ダウントアウンのコントはまだ枯れてないって期待してる。

ただあたしがこれ書いてるのは、もしかしたらその簡単な解決法こそが実は一番の問題かもって思ったからよ。貧乏な頃は、笑いを取れば取るほど人気者になれて、人気者になればなるほどお金が稼げた（あと女ともやれた）。このサイクルが松ちゃんの誇りであり天職だったはず。だけど笑いと金の目標が達成された今、松ちゃんは対等な立場の浜ちゃんと組まずに、権威を求めて「たけし二世」になりたがってる。でも松ちゃんと言うほどアートや政治や映画好きなの？ あたし思うけど、松ちゃんを目指す方向はむしろ志村けんじゃない？ このままMHKのリベンジせずに、ピカル（観てないけど）に視聴率惨敗で良いワケ？

だからまず、稼ぎ過ぎたお金をなんとかしましょ。「金の切れ目が……」って言うけど、金が結んだ縁なんて人を無駄に肥大化させるだけ。太った自称占い師に太らされるだけよ。つまりもう、没収ね。毎月いくらか稼がないと生活出来ないくらいまで私財没収。もちろん浜ちゃんもね。連帯責任で。コーヒー牛乳分け合った仲じゃない。それで映画撮るお金と合わせてテレビ用の下品なコント作るの。NHKじゃ放送禁止なヤツ。そしたら死に物狂いで笑い取りに来る、ギラギラ脂ぎったダウントアウンがまた観れるはず。今回はマジだったけど期待してるゾ！ バイちゃお！

今月のアドバイス・まとめ

天才かどうかは、単に笑えるかどうかだけ！

伝道者②：オパーリンのススメ

日本中で彼の名を、顔を知らないものは無い。誰しものが彼の事を知っている、彼の言動に興味を持っている。結婚すればニュースになり、それどころか話題の出来事に一言何か言及すればそれさえもニュースになる。おちおち街中で立ち小便もできないのではないだろうか。待ち行く全ての人の目が監視カメラに見えるのではないだろうか。そんな状況がどんな気分のするものなのか、僕には想像し難いが、まあ、あんまりいい気分ではないんじゃないのかなとは思ふ。

「一億総監視カメラ」な状況下で正気を保ち続けることは容易ではないだろうが、彼の職業はお笑い芸人であり、しかもただのお笑い芸人ではなく、日本のお笑いの明日を背負って立つことを義務付けられた「第一人者」なのである。常に新しい「笑い」を探求し続ける「創造力」を維

持し続けなければならない。「創造力」を維持し続けることは「正気」を保ち続ける事にも増して至難の業なのではないだろうか。

「俺の笑いが分からん奴は見なくていい」彼はそう言い放ち、徹底して既存の笑いをぶち壊してきた。先鋭的であり続け、なおかつ圧倒的な大衆の支持を得るという文字通りの「奇跡」を成し遂げ続けてきた。お笑いの歴史に「北野武」という時代があるとしたら、彼は間違いなくその時代を終わらせ、次の一時代、「松本人志の時代」を築き上げた。

何が言いたいかというと、彼は一人の人間がその一生で成し遂げうることをもうすでに十分すぎる程にやり遂げた、のだと私は思うのである。それは「彼が芸人として終わった」とか「もう面白くない」ということを意味するのではない。彼の出ているお笑い番組は依然としてその他諸々のお笑い番組と比べれば安定して面白いと思うし、『さや侍』も映画として十分に評価に値するレベルの面白さであったと私は思う。

しかし、他と比べれば依然十分に面白いのに、何かが足りないように感じる。そう感じるのは私だけではないのではなかろうか？特に、「ごっつ」などの彼の全盛期の笑いをタイムリーに見ていた人達にとっては。果たして、その「何か」とは何だろうか。それは一言で言ってしまえば、「松本人志」という「新しい笑い」に時代が塗り替えられていく感じ、ではないだろうか。そうだと仮定して、では何故今の彼にはその勢いが感じられないのだろうか。それは、彼がもう既に時代を塗り替えてしまったから、今や「松本人志の時代」だからである。革命は完遂してしまったのである。そして「長い倦怠の時代」が始まり、いまだに続いている。

「お笑い」がお笑いだけに止まらず、あらゆる文化の最先端として未来の創造者達に影響を与え続けるためには、どうにかしてこの倦怠を打ち破らなければなるまい。常に最先端であること、それこそが「お笑い」のアイデンティティーであろうから。で、問題は「誰が」この現在の倦怠を打ち破るのか、新しい時代を切り開くのか、ということである。

松本自身が過去の自分の笑いの息の根を止め、全く新しい「松本人志」として新時代を切り開く、その可能性がゼロとは言えない。が、厳しいだろうとは思ふ。結婚もし、子供も生まれてしまった。背負うべきものが出来てしまった。いつの時代も、パイオニアは手ぶらで素っ裸だ。今後、彼には「人間」として「人生」を生きてもらえばいいと思う。

では、一体誰だ？北野、松本に比類しうる若手は。異論もあろうが、僕は「劇団ひとり」を推す。メシアではないかもしれない、預言者レベルかもしれない。でも、今の現状で、「笑いの真髄」に最も近いのは彼だと思う。

今月のアドバイス・まとめ

「お疲れさま。後は劇団ひとりに任せろ！」

連載小説 第三回

『生き恥を、晒して足掻く、私かな』

執筆者 オパーリン

・ 3 「自己言及、引き続き」

処女作から一年の時をおいて、去年の屈辱を晴らすべく、僕は二作目と三作目、「瞳」と「灰色ネオン」を書き上げた。この二、三作目はほとんど同じ時期に一ヶ月くらいの期間で書き上げた。そのため、この二作は内容的にも関係が深い。

まずは二作目「瞳」について書いていく。「瞳」は処女作「働きアリは何を思う」執筆時の反省点をふまえて書いた。先にも書いたとおり「働きアリは何を思う」は「日記」的な要素が強い文章であった。それがあっけなく賞に落ちてしまったので、僕は「やっぱり、自分のことばかり書いていても、他人は面白いとは思ってはくれないんだな」と思い、私小説的な要素を廃し、自分の身の周りの来事ではない、一から練り上げた物語を書こう、と思ったのである。

こうして、「瞳」は私小説的な要素を廃した「物語」を目指してて書かれた。内容としては、まともや「恋愛もの」であった。「レミさん」という架空の女性人物を登場させ、「僕」との「情事」を描いた。「情事」、つまりは「セックス」である。セックスを書こうとしたことも「瞳」を書くにあたっての僕の挑戦であった。前述の通り一作目「働きアリは何を思う」は失恋の話であった。しかも告白してフラれる、交際する段階に至る前に失恋する話であったから、作中にセックスの描写はなかった。現実を基盤にして書いた「日記」であったので、「していない」ものを「やっちゃった」ことにしてはマズイのではないかな、という抑制が自分の中で働いていたのである。

しかし、どうにも「セックス」を書かないのでは収まりがつかないような気がする。主人公が作中において、どこにも行かないというか、不戦敗というか、何にもしてないじゃん、と「働きアリは何を思う」を書いていて思ったのである。

で、「じゃあ、次は「セックス」を書こう」、そう思って二作目「瞳」を書き始めたという側面がある。そのために事実性を放棄し、物語（フィクション）という形式を採用したとも言える。この当時（といっても現在も大して状況は変わらんのだが）の僕は「プライベートなセックス」を殆ど経験したことがなかった。「プライベートなセックス」を書くためにはフィクションを選択せざるをへなかったのである。

そんなこんなの思いを抱きながら、僕は何とか『瞳』を書き上げた。賞の応募締め切りの2週間くらい前だっけな。原稿用紙で75枚くらいの分量だった（賞の分量指定が80枚以下だった）。「書き終えたぜ」という達成感があったのだけれど、読み返してみるとこれがどうにも、あまりよろしくない。何がまずいって、読んでて面白くないのである。書いた自分が読んで面白くないのだから相当なものである。

何とか読み終え、あまりのつまらなさに多少ならぬショックを覚えながらも「何故こんなにもつまらないのだろう」と考えてみた。そして、それはおそらく「あまりにも空想的」であり、「その空想の底が浅い」からであろうと思った。描写がいちいち嘘くさいのである。特に、セックスの描写が観念的で、薄もやがかかったみたいに曖昧。つまり、『瞳』を書くにあたってのチャレンジであった「フィクション」と「セックス」を書くことに失敗したのである。

やばい、これでは落ちる、二年連続で落ちる。そのような屈辱は許されない、というよりも耐えられない。そう思った僕は、急遽三作目の執筆に取り掛かった。こうして書き上げたのが『灰色ネオン』である。『灰色ネオン』においては、前作の挑戦であり失敗である「フィクション」と「セックス」という主題の扱い方に修正を加えようともくろんだ。一言に修正といっても色々な修正の仕方があるのだろうが、僕は二作目における「フィクション」と「セックス」の方向性というか、雰囲気は残しつつ、「娼婦」という新要素を加えることでリアリティーの補完というか描写の肉付けを試みた。

詳しく説明しよう。『瞳』は全くの空想の話であったためにディテールが欠如してしまっていたので、ヒロインの「レミさん」に娼婦という職業をあたえ、物語が展開される場所を土浦の桜町（実在する歓楽街）に設定した。この「娼婦（歓楽街）」という要素によって『瞳』における「フィクション」と「セックス」の弱点はかなり上手に補完された、と自負している。先ほど、当時の僕は「プライベートセックス」を殆どしたことがなかったと書いたが、風俗にハマっていて、「娼婦とのセックス」は豊富に経験していたのである。だから、自分が体験したことを自分の感性に従って書けば良かったので、無理せず自然体を書けたのである。嘘と本当を上手く混ぜ合わせたのである。

と、『灰色ネオン』においては自信満々で、『瞳』もせっかく書いたし「リビドー（衝動）」だけは溢れ出てはいるし、ということで二作を賞に投稿した。この賞は予選と本選みたいな感じで選考が二回あるのだが、二作目『瞳』は予選で落ち、三作目『灰色ネオン』は本選に残った。この途中経過の通知が来たときは「まあ、妥当だな」と思った。ちなみに前年の『働きアリは何を思う』も本選で落ちている。「書くたびに進化している」と勝手に自負していたので「当然受賞するに決まるとるがな」と自分に言い聞かせ、受賞コメントを考えたりしながら結果通知を待った。

で、落選だったね。「マジかよ」と思ったが、メールの文面は何度読んでみても「落選」と書いてあるのであった。受験にしても就活にしても女にしてもそうだけれども、何だかんだ言っても「落ちる」っていい気分しないな。最悪だよ、マジで。

・ 4 「作品評を解釈」

この時点までに僕は小説を三作書き、学生主催の文芸賞に応募した訳なんだが、この賞は予選を通過した作品については選考委員（学生）と大学教授の講評をしてくれる。そこで、ここでは僕の作品がどのように読まれ、落とされたのか、書いていく。本来ならばこの賞が発行している冊子からそのまま引用したいところだが、著作権うんぬんがあるだろうから、彼らの評価、コメントを僕が要約する。つまり「僕」という視点、フィルターで再構成する。

選評が掲載されたのは一作目『働きアリは何を思う』と三作目『灰色ネオン』である。まずは『働きアリは何を思う』の選評の要約。

〈選考委員（学生）〉

- ・自分の内面を掘り下げているが、小説はもっと自由。未知の世界を探求しろ。
- ・ストーリー性が薄い。共感できない。
- ・背景描写不足。
- ・主人公の考えを押し付けられている感じがして、不快。

〈大学教授〉

- ・「等身大」の大学生っぽくて、まあ、それはそれでアリじゃね。
- ・自虐的に過ぎて、逆にギャグかと思った。あ、ギャグにしちゃえばいいじゃんw空虚な日常がテーマって、ありがちだけど、真面目に自虐してるから、そこが個性って言えば個性かな。

とまあ、こんな感じでディスっていただいた訳だ。再度断っておくが、原文ではないから著作権は侵害していない。俺なりに彼らの批評のエッセンスを抽出し、純化した。で、この評に対して僕がどう思ったかということなんだが、うーん、なんかなあ。まあ、そうですか、としか言いようがないんだな。特に学生の方々はディスっていらっしゃったなあ。教授の方はとても優しくかった。「マジでディスっちゃうと可哀想だから」ってところなのかな。

これらの評を受けての僕の感想というか結論。学生の意見については本質的な部分での拒否に関しては諦めるしかない、つまりあなたに嫌われるのは仕方がない、と判断した。先生のヌルイご批評については、まあ、「なるほど」とは思うけど、今後の執筆の役に立つかといえそうでもない、という感じだった。結局のところ、心なくディスってくれれば当然僕はムカつくので、そのムカつきをバネに「おっしや、君たちにとってもっと不快なもん書いちゃうわ」とやる気が出てきてしまうことが判明した。つまり、ディスられた方が僕の執筆にとってはプラスということが分かった。

次、『灰色ネオン』

〈学生〉

- ・言うことなし。
- ・ただの妄想、っていうかお前童貞だろ。いや、絶対童貞だわ。童貞ごときが小説書くなあああああ！！！！
- ・人物がステレオタイプ。

〈先生〉

- ・ウブやな。重いテーマを書ききれていない、安易。
- ・描写に工夫が感じられない。ありがち、コテコテ、創りすぎ。「女」を書けていない。

と、昨年にも増して辛辣なディスリであった。二年目とあって僕の方も薄々「小説の良し悪しって何だ？小説って結局は好き嫌いなんじゃね」と感じ始めていたが、さすがにこの評はショッキングであった。いやね、先生方の方はね、オブラードに包んで下さっているからね、いいんですよ。それに文章に知性的なものを感じるしね。そう、学生様方ですよ、問題は。いくらメンタル強くても「執筆インポ」になっちゃうよね、この罵詈雑言は。あまりに香ばしいので一つ一

つ返答しようと思う。

「いうことなし」。興味なし、ってことだよね。賞でまでシカトされるとはさすがに思わなかったな。

「童貞死ね」。この人が最強だったな。読んでいただければ分かると思うんですが、「童貞がモテなくてつらい」っていうお話なんでね、そこをディスっていただいてもね、そこを外すところの小説は無くなっちゃうんですわ。あと、もう一言だけ付け加えさせていただきますと、私恥ずかしながらその当時は風俗にハマりまくっておりましてですね、そこに関してはね、事実なんですよ、残念ながら。ですのですね、「童貞」ではなく「素人童貞」なんですね。

「人物がステレオタイプ」。これは唯一まともな評だったな。多少なりは自覚していた点でもある。やっぱり「フィクション」があんまり得意じゃないんだやな、僕は。だから「フィクションっぽいフィクション」になっちゃう。他人が読むとそう感じるのね、と参考になった、ありがとう。「リアルなフィクション」って、どうなのよ？言葉としておかしくない？とは思うのだけれども、その問題に関しては、非常に大事なところなので、後でじっくりページを裂こうと思う。

というわけで、学生の方々のありがたい「叱咤激励」によって、もやしっ子、つまりはナッイーヴな僕は見事に「執筆インポ」になった。創作により辛うじて保持していた人間としての、そして男としての矜持は完膚なきまでに粉碎されてしまったのである。

つづく

・「Living Together Lounge Vol. 87」

執筆者 オパーリン

2012年3月4日（日）。午後5時になる少し前、新宿2丁目の一角に入る手前の近くにソープラントがある交番の前で、僕はタバコを吸いながら相方の到着を待っていた。僕は街路樹の脇に突っ立っているだけだが、道行く人達は当然の事ながら歩き、僕の目の前を通り過ぎていく。等差店の向こう側では、なんだかよく分からない団体の凱旋カーが信号待ちの間中、「日本は破滅します！」と喚き立てている。と、信号の向こうにしかめ面した東町健太さんが現れた。もちろん手にはタバコ、彼は値上げ以降「わかば」を吸っている。よくもまあ、あんなにまずいタバコを吸えるものだと思うのだが、そこはまあ「吸えば都」ということなのだろうか。

手を振ると、向こうも気づいたみたいで、眼が合う。と、信号が青になって、健太さんが渡ってきた。

「いやー、遅くなってすみません。」

「ぜんぜん平気っすよ。場所、調べといたんで行きましょう。」

知り合ってから数年になるけれども、僕等はお互いに敬語で話す。特にこれといった理由があるわけでもないのだが。

グタグタと互いの近況を話しながら、僕たちは新宿二丁目の一角に入る。二丁目に来るのはこれで3度目だろうか、健太さんはもっとだと思うけど。前の二回は「レインボー祭り」というお祭りの時に来た。その時は出店が出ていたりして、人も沢山いて賑やかだったけれど、今日はただの日曜日だし、時間もまだ早いからか、殆ど人がいない。

と、話しているうちに目的地の前に到着した。「Arch」というライブハウス、雑居ビルの地下にある。階段を下りて会場に向かう。壁にはそれと思しきマッチョな男のポスターが沢山貼られている。

「まだ5時になってないですけど入れますかねえ。」

僕は健太さんに話しかける。と、健太さんは

「俺、免許証ないから年金手帳持ってきたんだけど、それでも大丈夫か聞いてくる。」

と言ってドアの奥に消えていった。薬物の摘発があったからか（朝日新聞の記者も捕まったし）、最近はイベントには免許証の提示が必要らしい。

「まだだっけさ。」

健太さんが戻ってきて、そう言った。僕らは階段を上がって外に出た。

ここで、今回のイベントの趣旨を説明しよう。「HIV陽性者の手記の朗読、とライブ」だそう。健太さんがツイッターで発見して、僕を誘って二人で行くことにした。ちなみに、僕も健太さんも同性愛者ではない、「ストレート」、「ノンケ」だ。今回のイベントに「ノンケ」の人がどれくらい来ているのかは不明だが、パンフレットには「Living Together Lounge」はHIVを持っている人も、そうじゃない人も、ぼくらはもう一緒に生きて

いる。」と書かれていたから、僕たちが参加しても問題ないだろうと思い、参加することにした。このイベントとは関係ないが、健太さんはこないだ検査して陰性だったらしい。僕は不明だ。

ライブの方は、フォークシンガーで翻訳者の中川五郎さんという人。当日になって知ったのだが、中川さんはチャールズブコウスキーの小説を翻訳している人で、僕はそれを聞いて異常にテンションが上がっていた。

五時になって会場に入ったが、実際に始まったのは6時半くらいだったかな。3人の人が手記を朗読したんだけど、どうも手記を書いた本人ではないらしい。手記の朗読のほかに自分の身の上話的なのをしていた。手記の内容はどうだったか、と聞かれるとうまく説明できないのだが、H I V陽性者の人が日常を綴った文章で、自分の病気への思いが書かれていた。病気になってしまった本人にしか書けない文章だな、と思ったな。

最初の二人の朗読の後、小休止が入って、その後、最後の人の朗読とライブだったのだが、この三人目の人から少し様子が変わってきた。このイベントの司会者の人と一緒に「反原発デモ」に参加しているという話をし始めたのだ。その後、この人は自分が障害者介助者の仕事をしていて、健常者の人に障害者への理解がないのに気づいた話をし、朗読した。

司会者の人が出てきて、中川五郎さんと呼べることになった経緯を説明しだした。と、この経緯が僕の中では驚きポイントであった。風俗ライターの松沢呉一さんに紹介されたというのである。この松沢呉一さん、本誌12月号の「読了リスト、感想文」で紹介した作家である。世界は狭いなー、と一人感動している間に、中川五郎さんの登場である。

ライブ、かっこよかったなー。しびれまくりだった。中でもボブ・ディランの「ライク・ア・ローリングストーン」を和訳した曲がめっちゃかっこよかった。キー低めに歌ってるな、と思ったら、後半に1オクターブ上げて絶叫していて、半端なかった。この中川さん、60年代後半の「関西フォーク」（反戦フォーク）の流れをくむ歌手で、完全に原発反対であった。

僕（おそらくは健太さんも）は脱原発でもには懐疑的な姿勢だったんだけど、中川さんの反権力フォークの熱に当てられて、「今度デモがある時は見に行ってみようかな」なんて思う様になった。判断するのは実際に見てからでも遅くはない、と思ったのだ。

今年の日本の貿易収支は、原発事故の影響で火力にシフトし液化天然ガスを買いまくったこともあって久々の赤字、個人的には再生可能エネルギーもマスコミが騒ぐほど夢にあふれたエネルギーではないと思う（日本の場合は2008年で全発電量の3.2%らしい）。基本的には「アレもコレも欲しい」は成り立たないわけで、原発止めたらその分の対価をどこかで支払わなきゃならん。成長を止めるか、火力維持でCO₂を沢山排出するか、まあ、色々あると思うが、それだけのことをしてでも止めなきゃならないものなのか。どうなんだろうな。分からんや。国民の総意で決めたほうがいい問題である（つまり、一部の権力者や利権者が勝手に決めるのは問題だ）とは思うんだが、それを決める「民意」という物がそもそもあまり信用できない。例えば、51対49で「維持」になったらその「維持」は国民の総意なのか？と思う。そして、判断の際にはありとあらゆる情報を提示し、国民がそれを十分に吟味してから判断するべきなんだろうが、

それが果たして可能か、と疑問に思う。マスコミが100%色のない中立な情報を提示できるとも思わんし、昼のワイドショーしか見ないお婆さんとか老害のじいさんがしっかり判断できるとも思わない。で、数的にはその老い先短きじいさんばあさんの方がマジョリティなわけで、単純な多数決じゃダメだね。50歳以上は0.1票、20歳未満は10票とか、何がしかの勾配をつけないと。

と、原発の話ばかりになってHIVがどっかに行ってしまったが、これはこれで難しい。社会的な偏見を無くそうという思いは分かる。となると、その目標地点はどこなのかということが分からない。差別全般について分からないのだが、その差別が全く無くなるということはどういうことなんだろう？HIVの人とそうでない人が何一つ違いなく扱われるということなんだろう？そうすると、その人がHIVであると考えないこと（つまり、その人がHIVだとは知らない状態）が最終地点なのだろうか。

と机の上で考えているだけでは、何にもならないということが最近になって少しずつ分かり始めてきた。かといって机の上の勉強を否定する気は全く無い。非当事者は、まず机の上で勉強し、その後実際に見て、そしてまた机の上で勉強するべきだと思うようになったのだ。HIVについては実際の当事者にまだ会っていないから何ともいえないが、同性愛者については、何度か当人たちと会話したりもしたので、もはや偏見は無いと思う。実際に「そうだ」と言われなければ分からないし、言われてもその人を見る姿勢が何か変わるわけでもない、ということが分かってきた。つまり「ゲイだからどうこう」ではなく、そいつがどうなのか、ということを見ればいいんだと思う。

とはいえ、まだ色々と難しい。じゃあお前は男の人とセックスできるのか、と聞かれたら100%無理とは言わないが、現段階では積極的にはしたいとは思わないだろう。つまり、差別しないことと、その人と濃厚な人間関係を築くことは一致しない。でも、一致しないのはおかしいんじゃないか、と割り切れなところがある。僕はブスを差別しないというならば、自分の中で最もブスな女とやらなきゃいけないんじゃないかと思うし、ゲイを差別しないというならば、ゲイにならなきゃいけないんじゃないかと思う、そういう自分がいる。

どうしてそんなことを思うかといえば、それは一重に自分の経験に基づくものである。僕が女にモテないと嘆く時、大抵の女は「えー、オパーリン君は面白いし、絶対もてると思う」と無責任極まりないことをのたまう。僕は「じゃあ、お前、今から俺とやれるか？」と聞くと、その女は絶句、沈黙する。つまり、どれくらいの覚悟を持って「俺は差別しない」と言えるかということが、言葉に責任を持てるかということなのではないかと思うのだ。

しかし、今言ったのは「性や愛」に関する差別についてだ。そして、誰かを愛することは他の全員を差別することだから、このような問題が生じる。だから、性愛に関する差別とそれ以外の差別はちょっと分けて考える必要がある。うむん、それにしても分からない。究極的に「差別しない」ということがどういうことなのか。他人が「差別している」のはすぐに分かるんだけど。特に韓国人や中国人が嫌いだとか言って差別しているのはすぐに分かるし、そいつが嬉々として差別するのを聞いているだけで胸糞が悪くなる。でもそんな俺はネトウヨを差別しているのではないかと、きりがないので、とりあえずはこれでおしまいにする。

「バクシーシ山下と森達也～タブーに挑む映像表現従事者の収斂進化的符合～」 オパーリン

・「バクシーシ山下と森達也～タブーに挑む映像表現従事者の収斂進化的符合～」

執筆者 オパーリン

・収斂進化・・・明らかに類縁関係の遠い生物間で、妙に似通った姿、あるいは似通った器官を持つ場合がある。この様な現象の事を収斂進化、あるいは単に収斂と言う。特にこのような例が見られるのは、似たような場所で似たような生活をしている生物同士の間で見られる。つまり、同じような生活をするものには、同じような形態や生理が要求され、そのため似た姿に進化する、というのである この様な現象は、様々なところで見受けられるが、特に、空を飛ぶとか、穴を掘るとか、水中を高速で移動するとか、生物にとって拘束の大きい条件下で特によく見掛けられる。形態の選択肢が少ない、と言ったところであろう。（ウィキペディアより抜粋、そして筆者（オパーリン）が改変）

・序

最近ずっと（ここ一年くらい）、バクシーシ山下（以下 山下氏）についての文章を書きたいと思っていた。しかし、思い入れの強い分、半端なものは書きたくないって言う気持ちがあったり、彼の映像がなかなか手に入らなかったり、色々とあって中々書き出せないでいた。そんな中、山下氏とは何の関係もなく、数ヶ月前から森達也（以下 森氏）の著作や映像作品をまとめて読んだり見たりした。で、森監督の作品を見るうちに何か引っかかるものがあった。既視感というところではないし森氏に失礼だろうが、「なんか見たことあるな、このスタンス。誰かと似ているな、同じじゃないんだけど」と思ったのである。で、その「誰か」が山下氏であると気づくのにそう時間はかからなかった。

山下氏と森氏の作品に対するスタンスや、ものを見る視点がどこか似ている、と意識し始めてからは、どちらかの作品を見るたびにもう片方の作品のことが頭の中をちらつかせた。それ以降、僕の中でこの二人の距離がどんどん近づいていった。そして今回、二人の関係性について文章を書いてみることにした。

この文章のタイトルに「収斂進化」という語を使い、本文の冒頭にその意味を略記したが、この語を用いることで僕は「似ている」ということと同じくらいに、あるいはそれ以上に「元々はその両者が異なっている」ということを強調したいと思っている。「同じもの」を「同じ箱（カテゴリ）」に入れる（分類する）のでは芸がない。本来異なるはずの両者が「似る」に至ったその背景にあるもの、それをこの文章を通して少しでも明らかにできればと思う。

・二人の略歴

まず初めに、両氏の略歴を紹介する。

バクシーシ山下（1967年1月27日生）

AV監督。岡山県邑久郡（現：瀬戸内市）出身。「バクシーシ」とはヒンディー語で「おめぐ

みを」の意。 現在フリー。元V&Rプランニング所属。

大学生の頃、テレクラのティッシュ配りをしていた際に路上で知り合ったスカウトマンの勧誘を受け、AV男優のアルバイトを始める。その後カンパニー松尾の誘いでV&Rプランニングに入社し、安達かおるの下で助監督を務める。1990年、衝撃的レイプ作品「女犯」でデビュー。「女犯2」では、実際に強姦しているとしか見えなかったため、フェミニズム団体から抗議を受ける等で物議を醸すこととなった。その一方で社会諷刺を題材としたAV作品を手掛るなど、「社会派AV監督」の異名を持つ。V&Rプランニング退社後はフリーで活躍、ハマジムやナチュラルハイなどで作品作りをしているが、編集の遅さと失踪癖により、コンスタントに活動はしていない模様。代表作には「女犯」シリーズ、「ボディコン労働者階級」、「激犯」など。
(ウィキペディアより抜粋、そして筆者(オパーリン)が改変)

森 達也(1956年5月10日生)

日本のドキュメンタリー映画監督、テレビ・ドキュメンタリー・ディレクター、ノンフィクション作家。早稲田大学客員教授、明治大学客員教授。

広島県呉市出身。新潟県立新潟高等学校、立教大学法学部卒業。大学在学中は黒沢清らのパロディアス・ユニティーに俳優として参画。卒業後は自主製作映画、演劇活動を経て1986年、テレビ番組制作会社のテレコム・ジャパンに入社。後にフリーとなる。

テレビ製作会社時代、「テレビでは放映できない」「テレビ的には存在しないことになっている素材」に興味を抱き、1992年にミゼットプロレスのテレビドキュメント作品『ミゼットプロレス伝説 ～小さな巨人たち～』をプロデューサーとして企画する。

1997年、オウム真理教に対するマスコミの一方的な報道に疑問を抱き、広報副部長荒木浩を中心にオウム真理教信者達の日常を追うドキュメンタリー映画『A』を自主制作で発表。2001年には続編『A2』を発表。独自の視点からオウム真理教の実像に迫った。

1998年、映画『A』がベルリン国際映画祭に正式招待される。2001年、続編『A2』が山形国際ドキュメンタリー映画祭にプレミア出品され、市民賞・審査員賞受賞。

一方、テレビでは、フジテレビ「NONFIX」枠で、『職業欄はエスパー』(1998年)、『1999年のよだかの星』(1999年)、『「放送禁止歌」～歌っているのは誰?規制しているのは誰?～』(1999年)など「視聴者自身が、無思考に安住していることを、追求する」ドキュメンタリー作品を続けて制作。代表的な作品については、内容および内幕を書籍化している。

近年は、ドキュメンタリーを撮る機会が減り、メディアや社会問題についての論客となっている。一般的には左翼と評されることもあるが、『言論統制列島』では「僕は、思想・信条から自由でありたいというか、むしろ特定の思想・信条やイズム(主義)にどうしても埋没できない。だからね、左でも右でも、まあ、どっちでもいい」と発言している。また、作品を見た者から「一見、反体制かつ刺激的に見えるが、単に禁忌に対する感覚に鈍いだけだ」との指摘に森本人も得心している。

「日本人全体が一人で考えない」ことに危機感を抱いているといい、常識とされる事項につい

て個々が疑ってみるべきと主張している。

・二人の近似、漸近について

略歴を紹介したところで、ここではこの二人について僕が引っかかりを感じた箇所、つまりはなんか似ていると感じた部分について、二人の作品を紹介しながら書いていく。

[出世作と非難]

どんな作家も生まれた時はただの人である。その人生のどこかで作品を創り、それを発表して世に問い、認知されて始めてプロの作家になるのである。作家が世間から「この人は作家だ」と認知されるきっかけとなった作品、いわゆる出世作について考えることからこの文章の本論をはじめ。処女作が作家の原点であり、ある種作家とその作品性を象徴するものであるならば、出世作は社会と作家が始めて接した、交わった作品であり、社会と作家との初夜であるとも言える。つまりは、社会が始めて作家とその作品を知った日であり、その後の作家の分類（カテゴリ）、社会の認知を象徴するものである。

まずは山下氏について。山下氏の出世作は『女犯2』、デビュー作『女犯』同様「レイプ」を撮ったAVである。その映像があまりにリアルだったため、「本当にレイプしてるんじゃないか」ということでフェミニズム団体から抗議を受ける。山下氏はそのフェミニズム団体が主催した「『女犯2』を考える会」に呼ばれ、そこで「演出だ」と主張した。山下氏はこの『女犯2』によって、世間（フェミニズム団体）から「鬼畜AV監督」として認知されたのである。ちなみに、僕はこの作品をいまだ見れていない、入手困難だからだ。V&Rプランニングから動画配信の形で見れることを最近知ったので近いうちに見ようと思っている。

僕はリアルタイムで当時の状況を知っているわけではないので、この「フェミ抗議騒動」がどの程度世間から騒がれたのか分からないのだが、桐野夏生がこの騒動を題材にして『天使に見捨てられた夜』という小説を書いていることを付記しておこう。

僕は「本当にレイプなのか」について考えることにあまり意味はないと思うのだが（だって、第三者にはそんな分からないでしょ）、山下氏の「レイプもの」の作品（『女犯2』ではない）を見た感想を書こう。実際、一般的な「レイプもの」のAVと比べると、映像が非常にグロテスクであることは確かだ。自在にゲロを吐くことができる「ポンプ宇野」という男優が女優にゲロを吐きまくり、女優は泣き、マジで嫌がっているように見える。しかし、所詮「見える」でしかない。それに、「レイプもの」で女優が嫌がってるように見えなかったら、それは作品として根本的に無価値だ。その意味では、山下氏の「レイプもの」作品は非常に秀逸な作品だろう。

次に、森氏について。森氏の出世作は地下鉄サリン事件後のオウム真理教信者たちの日常を追ったドキュメンタリー映画『A』である。これは見た。非常に衝撃的だった。教団の建物の周りを報道陣がとり囲んでいて、誰一人教団の内部には入れないのに、森氏だけが建物の中に入っていく。と、その一群のメディアの中の一人が森氏に食って掛かるんだよ「何でお前だけ中に入れるんだ、お前はオウムの手先か！」見たいな感じで。その場面が印象に残っている。森氏はその後も『A2』（映画）、『A3』（書籍）とオウム真理教を題材にした作品を出していて、「オウム、ダメ絶対、とにかく死刑」みたいな雰囲気、つまりは日本人の集団的な思考停止に異を唱

え続けている、と僕は解釈している。で、森氏の著作の中で、「被害者の気持ちを考えろ」的ないささか（いや、かなり）ヒステリー気味な批判を受ける様子が度々書かれている。

「レイプ」と「オウム」、二人の出発点は違う。いや、「違う」というと正確ではない、「同じ題材ではない」。でも、その二つの題材が包含している要素はかなりの部分で被っていると僕は思うのだ、これらの題材に対する社会の認識において。どちらも「絶対悪」なのだ。僕がここで問題にしたいのは「絶対」という部分だ。絶対だから例外はないのだ、だからもう何も考える余地はない、というのが社会の認識なのである。しかし二人は（社会からしてみれば）疑う余地のないはずのものを撮り、（社会からしてみれば）まるで挑発するかのようにつつ掻き回した。二人は社会からしてみれば見なくても良いもの（つまりは見たくないもの、目を背けてしまいたいもの）を自分たちの面前に突きつけてくる「嫌なやつ、邪魔なやつ」と認識されたのである。

[小人]

人々が見たくないものを撮り、見せる。山下氏と森氏はその根本的な姿勢において非常に似通っている、と書いたがその被写体となる題材についても、かなり被っている。ここからはその事例を挙げていく。

まずは、「小人」である。「小人」とは「低身長症」の人を意味する言葉だが、身体障害者への差別的な表現であるとして、この言葉はメディアでの使用が制限（自主規制）されている。この表現に対する規制のいうのはややこしくてよく分からん部分が多いのだが、「とにかく腫れ物には触るな」的な意識があることだけは確かだろう。表現規制については別項でかく。

山下氏は『スーパー女犯』、『スーパー女犯3 表現の自由』、『初犯』において「小人」男優（外国人）を起用し、「レイプもの」を撮っている。森氏も『ミゼットプロレス伝説～小さな巨人たち～』という、小人プロレスに密着したドキュメントを撮っており、これはテレビ放映された。

[山谷]

山下氏は『ボディコン労働者階級』、『ボディコン労働者階級2 外国人労働者が見たニッポンAVギャル』において、山谷の日雇い労働者を男優として起用し、AVを撮っている。この作品が後のAV業界に与えた影響は絶大で、いまだに「ホームレスとやる」系のAVがよく発売される。

森氏は山谷についてまとめた作品というのはおそらくないんだけど、『東京番外地』（書籍）において、一章をさいてルポを書いている。

[表現規制]

山下氏は自作がビデ倫に規制されまくっている。理由の説明なしにカットさせられたり、発売禁止にさせられたり。ビデ倫との攻防は『セックス障害者たち』に詳しく書かれている。森氏はテレビ放映されたドキュメンタリー『「放送禁止歌」～歌っているのは誰？規制しているのは誰？～』において、放送禁止歌といわれる歌が実は誰も「禁止」していなくて、メディアが自

主規制しているだけだということを暴いた。

[理論社]

この二人は同じ出版社から書籍を出している。理論社の「よりみちパン！セ」というシリーズから山下氏は『人はみな、ハダカになる。』、森氏は『いのちの食べかた』という書籍を出版している。ちなみにこの「よりみちパン！セ」というシリーズは「学校でも家でも学べない、キミが知りたい、リアルでたいせつな知恵が満載！！まったく新しいYA（ヤングアダルト）新書」というコンセプトを掲げている。

[死、肉]

これまでに挙げた「小人」、「山谷」、「表現規制」、「論理社」の四つは「同じ題材」だったが、これから書く「死、肉」については、題材としては二人は違うものを撮っている。しかし、かなり近い場所をウロウロしている感じがする。「死」という概念と「死体、肉」という物。これらについて、僕は、あなたは、どれだけ知っているだろうか、実感しているだろうか。そんな部分を彼らは確実に突いてくる。

山下氏は『全裸のランチ』において女優に脂肪吸引手術を受けさせて、その脂肪でラーメンを作って食べさせたり、男優に包茎手術を受けさせて切除した包皮を女優に食べさせたり、とカニバリズムを追及している。森氏は『それでもドキュメンタリーは嘘をつく』（書籍）において、パリ人肉事件の佐川一政（フランスで女性を殺人、死姦後に食べた事件）と接触した経緯を綴っている。ちなみに、佐川一政は事件後に帰国し、V&RプランニングのAVに出演している。山下氏はV&Rプランニングが「死体映像」を扱っていたことから、「死体」との関わりがある。森氏は『1999年のよだかの星』において動物実験とその成果としての医療に生かされている人間について撮った。動物の「死」とその死に生かされる人間という関係については、森氏は『いのちの食べかた』という書籍でも「と蓄」と「差別」について書いている。また、森氏は『死刑』という書籍で「死刑制度」を通して「死」について書いている。

・二人を収斂させる「外圧」

とここまでダラダラと事実を羅列してきた。もっと他に書き方が無かったのかなあ、とも思うけれど、羅列によって見えてくるものもあるんじゃないかと思う。ここまでの、二人はかなり似たような題材を撮っていることは分かってもらえたと思うが、僕はこれらの共通項がただの「偶然の産物」などではないと思うのだ。では何なのか？一体、何が彼らにこれらの題材を撮らせたのか？彼らの作品をある一方向に収斂させたのか？

それは一言で言ってしまうと、「社会」であろう。彼らの作品に眉をひそめ、目を背け、無視し、怒ってきた「外圧としての社会」である。二人の共通項は、彼らの内面にではなく、彼らが常に対峙してきたもの、つまりは彼らにとっての外部なのである。

しかし、「山下氏と森氏は社会と戦ってきた」と言ってそれを結論にしてしまうのはあまりにも雑だ。「社会」なんていっても漠然としているし、二者の共通項を「社会」ということにしてしまえるならば、そんなのは誰もが関係性を持つことになってしまう。だから、もう少し吟味し

なければならない、精査する必要がある。二人が「外圧としての社会」のどこら辺に目を向けてきたのか。

できれば見たくないもの、考えたくないもの。社会はそれらに蓋をして、無かったことにしようとする。それらの問題を加工し、単純化し、分かりやすくしてしまう。そうすることでどうなるのかといえば、夾雑物を廃し単純化された社会は、「実感」つまりは「リアリティ」を奪われ、フィクショナイズ、つまり極端なことを言えば「物語化」してしまう。二人はそれに抗っている。不合理なもの、残虐なものを撮り、突き付けることで現実を取り戻そうとしているのではないだろうか。

・おわりに

ここまで書いてきて、我ながら舌足らずな説明で申し訳ないと思う。しかし、現段階ではこれ以上言葉が出てこない。考えてみれば、「言語化する」ということそのものがある意味では事象の単純化なのであり、二人の作品がその安易な単純化を拒むのは当然のことなのである。その無理を承知で今回こうやって文章を書いたのは、二人の作品へ繋がる回路、つまりは現実への回路を、僕なりに稚拙でささやかにでも確保しておきたいと思ったからだ。

彼らの作品は、「普通に」生活しているとまず知ることのない「現実」を教えてくれる。この「普通」こそが曲者であり、最も注意しなければならないことなのだと教えてくれる。今、僕たちが生きる世界の「普通」はあくまで括弧付きの普通なのだと気付かせてくれる。「普通」に生きていては、何一つ（という用語弊があるけれども）生きていることを確認できないこの世界、このままでは薄皮に覆われた様に「実感」と触れ合えない。このままでは酸欠になり、いつの間にか自分で考える力をすっかり奪われて、死んだまま生きる顔の無い人形に成り果ててしまう。僕は一人の人間として普通に生きたい、括弧なしの普通を生きたい。その為には現実には繋がる回路を確保し続ける必要がある。だからこそ僕は、彼らの作品が映し出す「リアリティ」という「虚構」（全ての作品は例外なく虚構だと僕は思う）を、できる限り目を背けずに凝視し続けなければならないと思う。

・「悪気はなかった」

執筆者 東町健太

女の子はどうだか知らないが、一般的なイメージとして男の子というものは昆虫が好きだったりする。しかしそれも子供のうちだけで、歳を経るにつれ昆虫に対する興味はうすれ、そればかりか触るのも見るのも嫌になってしまったりするわけだが。かくいう私もそんな男の子であった過去があり、今現在、大がつくほどの虫嫌いであるわけだが少年時代は四六時中アリの巣を水攻めにして壊滅させたり、トンボの頭をむしりとったり、ちいさな虫かごにカマキリとバッタをいれてミクロな惨劇を演出したりして無邪気に笑い遊んでいた。そんな時代、私がもっとも愛情をそそいでいた昆虫はなんといってもカブトムシだった。小学校の低学年のころだったと思うが、夏休みに父の田舎（秋田県です）に家族で帰省した。そこはなにぶん田舎であるので山やら森やらが存分に残っており、その山やら森ではいままで図鑑でしかお目にかかることのできなかったカブトムシ・クワガタの類がそれこそ佃煮にするほどいた。狂喜乱舞してそれらを乱獲した私は、その収穫の一部を虫かごにに入れて大切に持ち帰り、日がなうっとりと眺めていたものである。

そんな宝物を友達に自慢したくなってくるのはどうしようもないクソガキであった私には当然のことだろう。そのころ一番仲の良かった友達、仮にS君とでもしておくけど、そのS君を電話でもって我が家に呼び出し、自慢のカブトムシを見せびらかした。S君にとってもカブトムシは憧れの存在であり、彼も目をかがやかせていた。しかし、S君は私のようなクズと肝胆相照らす仲になるようなしょうもないガキである。Sは、カブトムシを前にしておそらくテンションが上がりすぎて錯乱したのだろう、何か訳のわからないひもでもってカブトムシを縛り、ひもの端をもってそれをぶんぶん振り回すという暴挙にでた。いくら子供にとって最強の存在であるカブトムシといっても所詮虫けらである。振り回されたカブトムシは瞬時にしてバラバラにちぎれまくり、啞然とする私の前で哀れな醜惡な物体と化した。当然逆上した私は彼に食ってかかり泣きながら責め立てた。Sは言った。本当に申し訳なさそうな顔で言った。

「ごめん…悪気はなかったんだ…」

悪気がないならしょうがないかな、と思った。そして子供はバカなので、非業の死を遂げたカブトムシのことなど即忘れ、楽しくS君と遊んだ。

確か二十歳になったときのことである。その当時私はもってうまれたふざけた精神をもてあまし、かつ誰もが当然のようにもっているまともな社会性をもっていないという自らのおかれた状況に絶望しながら世の中を恨んで孤独な学生生活を送っていた。そんな私が何故だか高校時代の同級生の集まりに來い、と誘われた。信じられなかった。とても嬉しかった。高校時代、まともな友達なんて一人もいなかったくせにろくな思い出なんか一つもないくせに軽くいじめられていたくせに。一も二もなく、すぐさま参加を申し出た。その集まりの当日、安いネックレスを装着する、髪の毛にワックスを塗りたくってみるなどやたら間違えたおしやれをして挙句の果てに香水までつけ、午後六時待ち合わせにもかかわらず午前九時には集合場所の最寄り駅に到着、時

間まで延々そわそわしていた。

結論からいうとその集まりは最低だった。今考えるとすぐわかるのだが、二十歳くらいの人間が集まって酒など飲むとろくなことにはならない。うるさい、とにかくうるさい。酒はこぼすけんかははじまる奇声を挙げるバカはいるetc。そんな乱痴気騒ぎに一緒になってさわげるわけもなく、そもそも三時間あまりのその会においてほぼ誰からも話しかけられず、「あいつ誰？」みたいな声もちらほら聞こえるといった私にとってこれ以上ないほどひどい時間だった。

そんなバカ騒ぎは店、あるいは他の客にしてみたらかなり眉をひそめるものだったのだろう。何度か店員が注意をしにきた。顔を怒りで歪ませながら。店員は他の誰でもなくまっすぐ私のほうへ向かってきて、客商売の人間とは思えないような暴言を吐き散らかした。何故よりによって私なのか、周りを見渡してすぐにわかった。みんなもう滅茶苦茶になっていて、話の通じるような人間が一人としていなかったのである。結果として集団の中でもっとも静かにおとなしくしていた私のみがぼろくそに怒られ謝り続け、ほとんど暴徒と化して好き勝手やってる奴らは楽しげに「ひゃっほう！」とか言いながらビール一気飲み競争なんかしているのである。目を涙でいっぱいにしながら謝罪をし続け、空いた皿やビール瓶のかたづけまで手伝わせられていた私を見て近くにいた別グループの人が私に声をかけてきた。

「しょうがないよ。こういう時は一番飲んでないやつが損をするんだよ。店員の態度はむかつくだろうけど、あいつらも悪気はないんだし、騒いでるやつらだって悪気はないんだからさ」悪気がないならしょうがないかな、と思った。ビールこぼしたやつがいるからテーブルふかなきゃいけないので、あまり深く考える暇はなかった。

出勤時、私はいつも駅まで15分ほど歩いていっている。自転車はもっていないから徒歩で行くほかはない。以前は自転車を持っていたのだが盗まれてしまった。足立区に今私は住んでいるが、この地区は多少治安が不安な地区で自転車の盗難など日常茶飯事だ。毎日15分歩くというのも疲れる話だがもう慣れているので苦に思うことはない。それに歩いている方が季節の移り変わりなどもより感じ取ることができる気がするし、そんなに悪いことばかりではない。そうやっていつもどおり歩いて駅へ向かっているときに見た出来事だ。

私のいつも使用している駅の近辺は歩きタバコ禁止区域となっていて、歩きタバコをしている人を注意するために巡回している人たちがいる。あの人たちは区の方で雇われている人たちなのかな？まあそんな疑問はともかく、僕が見たのは歩きタバコをしていたおじさん、というかおじいさんといったほうがいような人が、そういう歩きタバコ注意部隊に捕まっていた場面だ。

「すいませんけどこのあたり、歩きタバコ禁止なんで…」

そう声をかけられ、喫煙おじさんはかわいそうなほどおろおろしながら、本当に申し訳なさそうな表情を浮かべ注意部隊に謝っていた。

「ごめんなさいごめんなさい…。ついついね…。本当に悪気はなかったんだよ、ごめんなさいね。」

彼はそういつて手に持っていた吸いかけのタバコを路上に投げ捨てた。

悪気がないならしょうがないかな、と思った。「歩きタバコ状態」を咎められたから、最速の

手段でその歩きタバコ状態を脱しなきゃ！と喫煙おじさんは思ったのだろう。結果的に彼のした行為は「ポイ捨て」というより評判の悪い行為なわけだが。

いろいろ振り返ってみて一つの真理を見つけた気がする。悟った気がする。いける、と思った。これならいける、と思った。これなら今までの苦労も全て報われるはずだ。

要は悪気がなければ何をしてでもOKなわけだ。はは、見つけたった。

そういう真理を携えて、とりあえずまずは職場に電話してみた。

「あ、もしもし。明日からちょっと5年間休みます。悪気はないんですけど、仕事キライなんで。悪気はないからその間の給料は当然ちゃんと払えよ。」

もう二度とこないでいい、と言われた。悪気はないけどうちの会社は君を必要としてない、と言われた。泣きながら謝った。

「ごめんなさい…こんな電話したけど…悪気はなかったんです」

・「科学的な政治」はありえるか

執筆者 多良鼓

原発事故が起きて1年が過ぎた。未だ、事態が収束する気配は見えず、放射性がれきの処理で各自治体と国が丁々発止を繰り返している。このような事態が続くここ1年で、良く聴くようになった言葉に、「科学的な政治」がある。「科学的に見て、正しいと思われることを最優先に考え、素早く行動することが求められる」といった言説は、誰しもが聞いた事があるのではないだろうか。こういった議論に、私は少々違和感を覚えてしまう。科学と政治は、そもそも重要視する点が全く違うからだ。

科学、特に自然科学は「方法」を重視した行いだ。科学的客観性を持ち、再現性があるような方法を用いて、初めて結果が評価される。私も自然科学系の研究室で学生として研究を行っているが、ちょちょいと自分に都合のいいデータを作り出すようなチョンボをしてしまったならば、即座に退学、よくても停学、研究室の汚点としてその名を一生残す事になるだろう。自然科学において真とされることは、科学的な方法そのものが真実性を担保しているのだ。だからこそ、科学者は安易に「絶対正しい」という言葉は使わない。科学的に証明した事柄は、『その実験条件において』『研究者が設定した仮定が』正しかったというだけで、この世のあらゆる条件に当てはまるとは限らないからだ。

では、政治はどうか。政治で重視されるのは「結果」だ。（法に触れたりしない限りは）どのような方法を講じたとしても構わない。求める結果を実現できればそれでいいのだ。そもそも、未来を予言できる人はこの世の中にいない（と思う）ので、社会をより良くする方法なんて、誰も知りはないのである。最良の結果を出すために市民一人ひとりが考えて、話し合い、合意形成をしていく。その結果が選挙や請願、圧力、市民運動という形で示され、政治に反映されていくのである。合意形成された方法によって動かされた社会は、もちろん結果論で正しかったかどうか判断される。政治の請負人である代議士は、選挙という形でその結果責任を負う。このような、結果を重視した仮定こそが政治を特徴づけているように私は思う。

これらを比較してみると、科学と政治はお互い水と油のようなものであることがわかる。例えば多くの人が「超ひも理論は正しいです！」という声を挙げたとしても、それが科学的方法によって立証されなければ、何の意味も持たない。どれだけの人数が賛同したとしても、そこに科学的客観性は存在しないからだ。逆に、「遺伝子組換え作物は従来の品種に比べ格段に収量が上がる」という言説は自然科学的に真ではあるだろうが、それが遺伝子組換え作物を導入すべきという政治決定に直接はつながらない。この言説を聞いた人々が議論し、合意形成を経て、初めて導入するかどうかの判断が下される。前者の「政治的な科学」には直ぐに変だと気付くものだが、後者の「科学的な政治」には言説が理にかなっている分、中々変なものに見えない。

トランスサイエンスという言葉がある。これは、科学的な知見を示す事は出来るが科学のみで答えを出すことが出来ない領域、のことを指している。このような領域では「科学的な政治」になることが往々にしてある。今回の原発事故、確かに科学的な知見に基づいた安全性や危険性の議論をする事は非常に大切だ。しかし、最終的に結論を出すのは、それらの議論に基づいた政治

的決定だ。これは、市民一人ひとりが考えて、積極的に政治参加することで乗り越えなければならない事柄なのである。科学的な知見は実際の社会に活用するときには手段でしかなくなる。政治的に正しい答えなんか出せない。科学的知見を手段として活用しつつも、やはり政治的議論では自分の思いを率直に伝えるべきだと強く思うのである。

参考URL

<http://togetter.com/li/252069>

科学と工学とその政治性について。

・「見果てぬ夢の為に「言葉」を求む」

執筆者 オパーリン

とある日、喫茶室「ルノアール」にて本号の編集を行っていたら、図らずもPCの電源が切れてしまった。次の予定までは小一時間ある。手持ち無沙汰だ。エッセイの一つでも書いてやろうかしらん。ということで、手書きでこの原稿を書き始めた。ルーズリーフにシャープペンシルで文字を書き付けてをる。最近履歴書を書くので、手書きで文字を書くこと自体は珍しいことではないが、それだってパソコンで原稿を用意してから書くだけであり、文章を考えながら文字を書くという「原稿作り」を手書きで行うのはめったにないことである。めったにないからこそ、これはこれで中々悪くない、オツである。果たして手書きで書くということが原稿にどのような影響をもたらすのか。かつて、作家たちは手書きからパソコン（ワープロ）での執筆に移行する際に、その変化が原稿に及ぼす変化をずいぶんと考察したはずである。実際に、ちょっと古いエッセイなんかではそういう文章をよく目にする。で、僕は今その逆を行っているのである。パソコンから手書きへ、その変化を体験しているのである。とまあ、実際はそんなに変化はないのだろうとは思いますが、徒然と筆を走らせる事にする

最近、2ちゃんねるのまとめサイトで「ワタミ」がやたらと叩かれている。渡辺美樹が叩かれている。入社二ヶ月で「過労自殺」に追い込まれてしまった社員がいるらしい。美樹はちっとも反省していないらしい。「バングラディッシュに学校を、云々」と寝ぼけたことをぬかしているらしい。許すまじ。というのが2ちゃんの論調である。

はっきり言って、労災認定が云々等の「真偽のほど」は僕にとってどうでもいい。裁判所に任せる。「鬼畜が！！」と罵詈雑言を浴びせる気もない。2ちゃんに任せる。大いにやってくればいいと思う。デモとかも、フジに限らずこっちもやっちまえばいいと思う。さて、ではこの件に関して僕の役回りは何だろうか、と考えてみる。完全な門外漢だといってしまえばその通り、それまで、であるのだが、どうも何か口を挟みたい。僕ができること、「想像力」を働かせ、「寝言」のような一人ごちをするくらいか。とにかくまあ、何か書いてみようと思う。

僕の弟は、渡辺美樹が理事長を務める学校「郁文館夢学園」に通っていた。元々は「郁文館」という名前だったのだが、美樹が勝手に「夢」をくっ付けて、こんな恥ずかしい名前になってしまったらしい。

学校の名称に限らず、美樹は内部の学生からはすこぶる評判が悪かったみたいだ。教師が「生徒」「親」「同僚」から採点されるというシステムが導入され、そのストレスでどんどん辞めていくみたいだ。また、定期的に「夢合宿」なる催しが執り行われ、生徒たちはその合宿で自分の「夢」を見つけることを強制されるらしい。保護者については、よく分からん。本（教典）を買わされるのかな。うちの親は一冊かってたな。それを暇な時にチラ見したことがあるんだけど、凄かったな、うん。美樹の成功哲学みたいなのが語られてたな。別に語るのは自由だけどもさ、それを唯一絶対の真理みたいな感じで生徒に教え込もうっていう風になっちゃってるんだとしたら、それは違うな、と思うよ。極端な話、「夢」が「持たないと罪」みたいなものなのだとし

たら、俺はそんなものいらない、願い下げだ。っていう生徒がいたとしたら「それはそれでありだね」と言えるくらいの懐の深さが欲しいな、教育には。

飲食の仕事がキツイというのはなんとなく知っている。実際、一人死んでしまったわけだし。それは氷山の一角に過ぎず、実際もっと沢山死んでるんだろうな、とも思う。根拠なんてないけどね。根拠なんて言い出したら、どんどんものが言いにくくなると思うんだよね。まあ、それはいいや。話を戻すと、死んじまったら夢もクソもないんだよな。今後、美樹はどの面下げて生徒に「夢」の話をするんだろうか、と思う。

美樹には息子がいる。「夢学園」に通っている。息子が「夢学園」に入ったエピソードとかも本（教典）に書かれている。で、世間から「鬼畜」と呼ばれる美樹の息子はどんな気分なんだろう、と美樹は考えるんだろうか、と僕は思ったりする。他人の気持ちは分かん。だから、僕には息子の気持ちは分かんが、もっと分からないのは美樹の「気持ち」である。そして、僕がこの件に関して一番知りたいのも美樹の「気持ち」である。カメラの前ではその「口」が絶対に語らないであろう、彼の教典には微塵もかかれまいであろう、美樹の心の奥底にある「気持ち」。それが知りたい。孤独であろうか？ きっと孤独だろうな。分かんけど。美樹の「夢」は今、一体どんな夢なんだろう？

S Mクラブの常連客には社長とか社会的な地位の高い人達が多いことはよく知られていることである。己が信念を貫き、一国一城の主となった社長達は、誰も知らぬ心の弱さを打ち明けに、日夜S Mクラブに通う。調教され、肉奴隷として辱めを受け、その肥えた尻に鞭を打ち据えられ、その「痛み」によってやっと、ほんの束の間だけ自分の「生」を「実感」する。また、自分が虐げてきた「社蓄」と同じ痛みを味わったつもりになって、贖罪の涙を流すのかもしれない。

不謹慎極まりない、と思われるかもしれない。お前は被害者遺族がこの文章を読んだらどんな気持ちになるのか考えたことがあるのか？ と怒られるかもしれない。確かにその通りだ。不適切な内容だろうと思う。でも今は、僕にとってはこのS Mの下りが必然だ。何でもかんでも制限していったら、僕たちはどんどん不自由になっていく。その内、面倒臭くなって書くことも考えることさえも止めてしまう。それが一番やばいと思う。考えなくなったとき、その時がエンディングだと思う。肉体は縛られていても、脳みそだけはどこまでも縦横無尽に動き回ってなきゃ、それこそ僕たちは家畜、社蓄になってしまう。だから、僕はそのまま書く。

今回の「ワタミ」の一件は本当に氷山の一角に過ぎないのだろう。明らかにされないまま闇に葬られていく類例は山ほどあって、これからも量産され続けるんだろう。この一件が物語っているのは、この国の、この世界の構造そのものだ、と手垢のついて表現だが、そうと言わざるをへない。叶うはずもない「夢」を強制され、虐げられ、搾取され続ける「社蓄」と、その構造のトップに君臨する社長という名の「支配者」。使い捨ての労働力が幸せじゃないのは言うまでもないが、果たして社長は幸せなのかとも思う。このシステムを維持する為にそれぞれの役回りをプレイさせられている人全員が、少なからず不幸なんじゃないかと思う。この人生のあらゆる出来事が、まるでゲームみたいだと思う。そしてつくづく「クソゲー」だと思う。

社蓄の現状は、最近ネットを中心にして表に出始めている、まだまだ十分とはいえないかもしれないが。一方で、このクソゲーにおいて社蓄と対になる役回り、もう一人のメインプレーヤ

ー「社長」の心理は、本質的な意味ではまだ全くといっていいほど表に出てきていない。

このクソゲーがクソゲーであることを一人でも多くのプレイヤーが認識し、少しでもましなゲームにするべく変えていく。そんな途方もない「夢」を見る為には、このクソゲーの最重要プレイヤーの一人である「社長」の真の言葉が欠かせない。僕は途方もない「夢」を見てやろうと思う、「身の丈にあった夢を」というこのゲームの最重要ルールを無視して。そんな見果てぬ夢のために、美樹よ、言葉を発しろ。その内にほんの一ミリでも苦悩があるのならば、それを吐露しろ。無いはずがない、いや、あると信じたい。僕はお前がまだ「人間」だと信じたい。お前が完全な「キャラ」でしかないとは思いたくない。

・「マインドトラベラー」

執筆者 鶴首

気がつくと私は森の中に倒れていた。そして、倒れていたのかどうかさえわからない。体がある方向に引っぱられて何がなんだかわからない。どの時代、どの世界に自分が存在しているのか分らない。そもそも存在しているのかどうかさえ分らない。なぜなんだ、私が苦痛を抱えながらも生きていた愛おしきあの世界はどこにいつてしまったんだ、こんなところで生きていけるのだろうか、と思いを巡らせているうちに吐き気がして来た。目の前の景色が歪んでいく。救急車を呼ばなければ！と思って携帯を探すもどこにも見当たらない。公衆電話さえ見当たらない。自分は麻薬などやっていないのにどうしてなんだ！いや、やっていたとしてもいい！早く警察でもなんでも誰でもいいから来てくれ！びいやあああああああああああああああああ！

その瞬間だったかそれからどれくらいの時間が経ったかは定かではない。歪んだ景色の中から得体の知れない緑色の球体が出現した。私はその緑色の球体に懐かしみに似た安らぎを覚えた。そして何故だかはわからないが自分の今いる場所が安全であるような気がした。その瞬間、緑色の球体は景色の歪みとともに消え去った。いったい何だったのだろうか？いやでも確実に何かがおかしい。まだ元の「腐った世界」に戻れてないし。しかし何故か先ほどの吐き気が安らぎ、根拠のない余裕のようなものが感じられた。体は相変わらずあらゆる方向に引っぱられたままだが。

しかしどうやってこの世界で動くのだろうか。泳ぎ方なんて知らないぞ。歩ける場所なんてないし。そんなことを考えていたら体が勝手に動いた。でもそっちに行きたいんじゃない。いや別に行きたくないわけじゃないけど。どっちなんだよ。いやどっちでもいいから。・・・なんて、どうしようもない自問自答を繰り返す。うん？こっちに動いてる訳じゃないぞ。景色変わってないし。あっちか。ってあっちに自分の体がないじゃないか。望遠鏡なんてハイテクなもの買うお金なんてないし。いや財布すらないし。口座すらないし。そもそもなぜあっちの風景がわかるんだ。目がおかしいのにも程がある。そんなことを考えていたら羊が出現した。これは自信を持って羊だといえる！羊に5万円！いやそんな大層なお金持ってないけど。じゃあ借金してもいい！いやどこに借りられるんだろう？まあいいや。…………いやよくない！羊から変な赤いオーラが出ている！赤いオーラは燃え広がる炎のように私のほうに向かってきた！びやあああ
あああああああああああああ！！！！…………うん？ちょっと待てよ。何故方向が分かるんだ？そういったわけで、私はまたこの世界での生き方を習得した。この世界で必要なのは「刺激」なのかもしれない、ということを悟った。しかし、赤いオーラは依然として容赦なしに私を包みこむ。熱いという感覚ではない。締め付けられるような痛みに襲われ、息が苦しくなる。私は再び気を失った。

どれくらいの時間が経ったのだろうか。私は先ほどまでいた森の中で目が覚めた。というか、まったく同じ場所で目が覚めた。デジャヴュというやつか？これは…いや、少しだけ違うところ

がある。やたら自分の体が温かい。しかも自分の思ったように体が動かせる。どうしたんだこれは？まあいいや。せっかく体が動かせるんだから少し動いてみよう。

そんなわけで、私は森の中を探索し始めた。しかし、どこまで行っても木々が途切れない。森林浴にはもってこいだ。寒くないから多分ロシアではない。進んでも進んでも木。この木なんの木気になる気になる、見たことのない木ですから、見たことのない花が咲くでしょう。ん？何やら急に明るくなってきたぞ？何がある・・・と思ってみたらいつの間にか目の前にエメラルド色の湖が広がっていた。静かな湖だった。水鳥が一羽もない。さて、ここは塩湖なんだろうか、いやあそれにしても美しい湖だなと思い私は真上から覗き込んだが、水はガラスのように透き通っていた。おそらく光の反射の加減でエメラルド色に見えたのだろう。しかし不思議なことに水の中にも生物らしき姿が見当たらない。湖底に石がごろごろと転がっているだけである。しかもこの世界には羊以外の動物はいないのか？というか羊すらあの1頭だけで他にいない。湖の外も中も見渡せど見渡せど殺風景。ミミズだってオケラだってアメンボだっていない。ましてやトンボもカエルもミツバチもない。待てよ、自分は何なんだ？羊のような気がする。いや間違いなく羊だ！と思って湖面を見たらやっぱり羊だった。なるほど、羊だったんだー！なんだ、羊なら別に元の世界に戻る必要ないじゃないか。ビバシープライフ！

まあとにかくなんか納得して心が安らいだら腹が減ってきた。何か食おう。肉でも食いたいな。いや共食いはよそう。どうしようか？ベジタリアンにならなきゃいけないのか。まあ羊はもともとベジタリアンだしな。でも肉が食いたい。そう思って自分の足に噛みついた……………なんだ、これ。まずいし痛い。うわあ血が出てるよ！そして舐めた。まずい。洗わなければ！と思い咄嗟に湖に足を突っ込んだ。するとあろうことか傷口が塞がっていくではないか！これが「神秘的湖」なのか！こりゃ便利だ。怪我したらまた来よう！いいものみ一つけちゃった☆……………まあそんなことはどうでもいいとして、なんか食べ物はないのかなあ。キノコでも食べるか。しかしドコノコノキノコ、プップルパパープルパッパー、下手に毒キノコを食べたらたまったもんじゃない。そもそもキノコなんて周りにないし。やっぱり草かよ。ベタだなあ。いや、ベタなものだけ追求してミーハーな羊にはなりたくないんだ。私はキノコが食いたい。ドコノコノキノコ♪コノキノコノコノ♪ドコノコノキノコ♪キーノコキノコ♪

いかん、思わず歌って踊ってしまったら更に腹が減った。腹の虫が鳴いている。

グキユウウウウウウルルルルルル！何か食べ物が欲しい！腹が減っては戦は出来ぬ！いや戦なんて望んでないけど。どうしようどうしよう。そうやって腹の虫を暴れさせていい感じの音楽が奏でられるようになったな、と思った時、目の前が突如眩しくなった！そして目の前にクラゲ・・・いやキノコの精霊が現れた。何となくマツタケに似ている。

「ワ、わたしを、た、た、た、食ベたいのか？」それはしゃべった。驚いたー！私は答えた。

「食ベたい、という気持ちはやまやまだけど、そういわれてしまうとどうもねえ」

「食べてくれてもいいんだからね！それとクラゲじゃないから！」どうやら私の心が見透かされているようだ。ていうか何故わたしは喋れるんだろ？いや違う。「しゃべった気」になっているだけだ。もしかしたらこの世界は私の理想が作り出した禁断の世界なのか？ならどんなこともできるはずだ！とりあえず伝説の剣を探す旅に出よう！と変な妄想をし始めたとき、私は目が覚めた。

と、こんな体験をしたわけですよ。夢の続きが見たい。でもたぶん見られる。見られると信じていけば見られる、私はそう確信している。

オパーリンヶ月（日記より）

オパーリン国王の動静。これを読めば王国全体で何が起こったのか、分かるでしょう。今月号から巻末に降格（笑）。

2012年2月

・26日

第14回文学フリマへの参加が決定。『月オパ』量産のためにレーザープリンターのトナー（8000枚用）を購入。

2012年3月

・3日

自宅のアパートはネットがつながる構造になっておらず、やむなくドコモのポケットWi-Fiを使っておったのだが、料金が以上に高いので、AuのWi-Fiに乗り換え。ついでにパソコンを買い換えた。

これまではacerのネットブック（ちっこい携帯用のやつ）をメインPCとして使うという荒業を行っていたので何かと不便が多かった。具体的には、atomというOSが積んであったのだが、このOSが非常に非力で、あらゆる作業がストレスフルだったり、ディスプレイが10インチちょいなので、本誌の編集等を行うにあたり、非常に目が疲れる、肩こりが半端ない、などである。

この反省を生かし、今回はacerのウルトラブックを購入。「またacerかよ!」と思われるかもしれないかもしれないが、実は個人的にacerのPCはデザインが好みで気に入っているのだ。今回買ったAspire S3-951-F34Cも、アップル社に訴えられるんじゃないかと思うくらいの「似せた」デザインで、これがまたカッコイイ。液晶は13インチ。インテル入ってるう!と良い事づくめ。

一点、マイクロソフトのオフィスソフトが入っていないという問題点があったのだが、これも安い大体ソフトを購入し、そこそこ互換していたので問題なし。後数年はこの子にお世話になります。PCちゃん、よろしくね。

・4日

「Living Together Lounge Vol. 87」に参加。

・7日

マス読ライブ報道編に参加。

・14日

2000円でトースターを購入。購入した雑貨屋さんで、ガラの悪いおっさんが若い店員（おそらく大学生）にマジギレしていた。そのおっさんの日頃のストレスを発散している感が半端なく、店員さんが可哀想だった。「じゃあ、買うな」って言ってやれば良かったのに。

・15日

「本日は暖かいでしょう」という天気予報を信頼してツーリングに出かける。後悔、ぜんぜん寒かった。が、その途中で廃墟っぽい結婚式場を発見し「お、これは月オパのグラビアに使える

るじゃん」と思い撮影。廃墟って、その場所だけ時間が止まったようになって、周囲の喧騒からも隔離されたような「しん」とした感じがして、素敵だった。

・ 17日

北関東（群馬、栃木、埼玉）を中心に展開する書店の説明会。「履歴書持って来い」って書いてあったのに、持ってこない学生が大量にいて笑った。社員の人は物腰が低いというか若干自虐的、「うちのような会社に興味を持っていただけましたら、是非選考を受けてください」みたいな。履歴書すら書いてこない学生にまで「じゃあ、できれば1週間以内に送ってください」って許してたしな。「なめんな、帰れ」くらい言ってもいいと思うんだけどな。とにかく人のいい社員の方でした。

・ 19日

芝浦と場見学のための事前研修の二回目に参加。

・ 25日

新潮社の筆記試験。ホテルの大きなパーティー会場にズラーっと机が敷き詰められ、受験番号ごとの席誘導の掲示を参考視すれば、おそらく700人位の学生が受験しに来ているのだろう。この中から数人しか受からないんだなあ、と思うとなんだか笑えてきて、逆に開き直ってリラックスすることができた。「倍率は数百倍」と文字にすると実感が湧かないけれど、実物としてそれだけの数の人間を見せ付けられるとやっぱり圧倒されるね。

・ 26日

芝浦と場のと畜加工現場を見学。詳しくは来月号にルポを書こうと思う。事前の研修を2回していたから、計3回足を運んだことになる。食肉加工への理解というか、現場でどの様に肉が作られているのかという事にはかなり詳しくなったと思う。

このコーナーでは僕がその月に読んだ本や、見た映画等の簡単な感想を書いていきます。

- 本 -

・野坂昭如

『てろてろ』

スカトロジスト、オナニスト、酒乱、死体愛好家、元スパイのアサシン等の登場人物がテロを企て、次々と無差別殺人をしていくという話。野坂氏は「あとがき」で「現代におけるテロリストは、むしろ、もっとも心やさしい人間といえるのではないか、とまったく唐突に思いついて、この小説を書き始めた。」と語っている。

僕達が普段目にすることのできるマスコミのニュースでは、テロに限らず犯罪者は「絶対的な悪」として報じられる。そして、そのニュースを見ている「一般人」はもちろん「良識ある善人」という設定である。こうして、視聴者と犯人は「まったく別の人種」として隔離される。

この様にして犯人と隔離されることで、僕たちはニュースの出来事を「自分たちとは無関係な別世界の出来事」として認識し、すぐさま忘却する。

果たしてそうなのか？ということなのである。犯罪者は僕らとは何の関係も無い残虐非道な鬼畜であり、人ではない、と言い切るだけの証拠がどこにあるのか、ということである。僕が明日レイプ魔にならないと誰が言い切れるだろうか、僕自身ですら証明できない。

誰しものが犯罪者になりうるし、犯罪者と僕たちは何の変わりもない同じ人間である。そう考えることで初めて、僕たちは犯罪について考えることを始められるのではないだろうか？

小説に話を戻すが、物語の中で登場人物たちは次々に罪なき人々を殺し、考え、悩み、そしてまた殺す。そして、筆者の発想の通り、限りなく心やさしい人達として描かれる。

テロリストが心やさしいということを、証明することはできない。だからこそその逆もまた真なり、なのである。テロリストが残虐極まりない鬼畜だと証明することもできない。もし、もし万が一、テロリストが心やさしかったら、心やさしいからこそテロをしたのだとしたら、この社会はテロについて考え直すか、やさしさについて考え直すか、またはその両方をするを余儀なくされるだろう。どちらにせよ、この社会の根底を揺さぶるような発想の転換をしなければならないだろう。だからこそ、現在の社会においてはテロリストは絶対に心やさしくあってならないのだ。残虐でなければならない、ということになっているのだ。その姿勢には思弁の欠片もない。

・釣崎清隆

『世界残虐紀行 死体に目が眩んで』

「死体カメラマン」というおそらくは日本に一人しかいない職業の筆者が、自身の死体を探して世界を巡る旅を綴った本。作中にも沢山の死体写真が収録されている。

「死」と「死体」、その二つの違いについて何一つ答えることのできない程度の認識しか僕は

持ち合わせていない。死体を写さないメディアしかない国に生まれ育った僕は、この本を読んでそう思った。

・ 団鬼六

『往きて還らず』

団先生の作品は本家のエロ系の他にも色々と凄いのが沢山ある（『真剣師 小池重明』とか）んだけど、これはちょっとどのカテゴリにも入らないような、何ていうのかな、それこそ文学色が強い作品だった。

特攻隊員が「俺が飛び立ったら、この女をお前の妻にしろ」って言って愛する女を仲間に引き継ぐんだよね。でその仲間も特攻隊員だからまた別の仲間に引き継ぐの。そうやって絶世の美女として描かれるヒロイン八重子がリレーされていくの。で、八重子は逝く運命にある男たちを愛し、そのリレーされる運命に殉じるの。

この小説を読んで「女を物みたいに扱うな」とか真顔で言う人は、うん。いないことを願うよ。

とにかくもう、読後に言葉が出てこない。鬼六文学の美の極致、谷崎とかに比類するレベルのそれ。

考えてみると悲愴極まりないストーリーなんだけれども、読んでて不思議とそういった湿っぽさみたいなのはあんまり感じない。「死」の話なのになんでか「生」というか、命がほとぼしる様な強烈なエネルギーを感じる。そんな小説でした。

・ 森達也

『死刑』

「疑わしきは被告人の利益に」という「推定無罪原則」は司法の大前提となるルールである。詳しいことは各自で調べてもらいたいけど、このルールは超重要なルールなのである。もしこのルールが無くなると、極端なことを言うと「お前、レイプしそうな顔してるから死刑」とか、「顔がセクハラだから死刑」みたいな事が起こってしまう。

国家という権力に対して個人は圧倒的に無力だからこそ、権力の暴走を防ぎ、個人を守るための大事な原則なのである。しかし今、司法の現場ではこの推定無罪原則が崩れてきてしまっている、と著者は主張する。なんでかといえば、その背景には危機意識をあおるマスコミと、それによって暴走する「民意」が深く関係している。裁判員制度も始まった。言ってしまうと裁判に「市民感覚」を取り入れようという話である。こんな中での「死刑制度」って、というかそもそも「死刑」って本当に必要か？という話。

・ ジョージ・オーウェル

『一九八四年』

僕は正当な文学への造詣は浅い。特に海外文学は殆ど読んでいない。「これは常識っしょ」みたいなやつも殆ど読んでいない。半ば開き直っていたのだけど、でもさすがにこればかりは、とい

うやつである。読む本読む本「オーウェルの『一九八四年』は～」とプレッシャーを掛けてきたので、ついに読んだ。

めっちゃ凄いわ。帯に「20世紀文学の最高傑作」みたいに書かれてたけども、大げさじゃないわ。

もうね、社会に抑圧される人間の悲哀、そしてその無慈悲な社会を作り上げたのもまた人間という不合理、そういったなんやかや全部ひっくるめての「人間」、グチャーっとしたのが余すことなく書かれていた。

・小松左京

『一生に一度の月』

小松左京のショートショート傑作選。今までさんざん「分からん、分からん」と言ってきたが、分かったわ。いや、分かったって言うと言語弊があるな、面白いと思ったわ。スゲーとも思った。

600文字の小説とか、書けないよな。で、あれだけのものを書いちゃうんだから凄い。あと、あの時代にあれだけの科学への造詣があることが凄い。で、解説では「俺は長編向きの作家」って言ってるからな。思えばまだ長編を読んでないから、がんばって入手しなきゃ。

・松尾スズキ

『同姓同名小説』

芸能人と同姓同名の人の小説。みのもんたの話が一番好きだった。シュールすぎて俺のレベルでは付いていけないのもあったなー。あと、タイムリーに知らない人の話とか。2012年バージョンを書いてくれたら絶対面白いと思う。

・小林恭二

『日本国の逆襲』

こういうSFもあるのか、と思った。科学やら技術ではなくて、日本人の「日本人らしさ」に想像力（悪意）を働かせて、それが極度に増幅した日本を再構築することでエスプリ（風刺）を効かす。

そんでもって、筆者の「ニッポン国」への執着というか憎悪が凄い。その怨念が作品に結実している感じ。いやー、天才だわ。ツボにはまった。

・白石一文

『この胸に深々と突き刺さる矢を抜け』

週刊誌の編集者の話。久々に長編を読んだんだけど、結構すんなり読めたな。悪くなかった、悪くなかったけど、それだけだったな。まあ、ふつう。

- 映画 -

・『ムカデ人間』

マッドサイエンティストの外科医、ハイター博士が人間を三体連結したムカデ人間を作る、という超絶鬼畜映画。マジ受けた。

ホラー・オカルト系の映画って「おいおい、そこ話の展開おかしいだろ！」と突っ込みを入れながら見るのが楽しいと思うのだが、この映画も期待を裏切らない突っ込みどころの多さであった。マッドサイエンティストの博士がマジで計画性なさすぎなところとか、ベットに拘束するためのバンドがめっちゃ簡単に外れちゃうところとか、ムカデ人間は真ん中の人が一番キツイみたいなこと言ってたのに何故か最後尾が最初に病気になってるところとか、挙げればきりが無い。ただ、中でも一番おもしろかったのが先頭の日本人（何故か関西人）。サッカー日本代表の長友にクリソツ。外人が抱いている「間違っただ日本人観」を体現したキャラだった。

間違いなく今世紀最高に笑える映画だろう。ちなみに、一緒に見た友人はグロくて気持ち悪くなっていた。リアリティーから遠ざけられた現代人の軟弱さを露呈していた。

・『さや侍』

東町健太氏が絶賛していたので拝見。『さや侍』に限らず、東町氏は前々から松本映画を高く評価している。で、僕の感想としても、かなり良かった。あの人物同士のコミュニケーション不全的な「間」というかなんというか、その感じが松本のシュールさみたいなのに繋がってくると思うんだけど、そこがツボれるかどうか面白いと感じれるかどうかの分かれ目だと思う。板尾じゃない方の看守とか、あの呆け具合が最高に面白い。

・『ウワサの真相（洋題 ワグ・ザ・ドッグ）』

米国大統領のロリコンスキャンダルを架空の戦争をでっち上げてもみ消すという話。ギャグ要素満点であり、風刺も効いていて面白かった。で、国民感情を煽るために、愛国の歌とか、戦争で散った英雄の歌とかを作るんだけど、その歌がまたウケる。「うわーありそう」って感じの歌なんだよな。

・『THE OUTSIDER 2011 Vol. 4』

不良たちの格闘技、アウトサイダー最新作。何が好きって不良達のバリエーションのなさが面白いんだよね、いきがり方が型にはまっていて「無法者」の筈が「真面目に「不良」している人」になってるんだよね。

今回は「ロシア軍」との対抗戦の第二回が入っていて、最高だった。言ってしまうと「殺しのプロ」であるロシア軍、もう眼が違うよね。今回は不良じゃ勝てないと踏んだのか「プロ」と名乗るセミプロ的な人たちが戦ってたんだけど、なすすべ無くやられてたな。

あともう一点の見所。あの人達って勝つと殆ど必ず「仲間に感謝」みたいな、それこそ「絆」みたいなのを強調するんだよね、泣きながら。対戦相手にも敬意を表しちゃうし。ハイ感動！的な。

冷酷なアウトローなんだから「クソ弱くて話にならん、死ね！もっと強いのを連れてこいや！血だよ血、俺は血に飢えてるんだよ！」位のこと言えればいいのになあ、と思うんだが。そういう人

は少ない、でもたまにいたんだよね。まあ、そういう人でもしばらく戦っていると段々と「いい人」に更正されていっちゃうんだけどさ。

・『マイ・バック・ページ』

70年代の学生運動とか連合赤軍とかの左翼運動をモチーフに、活動家（松山ケンイチ）とその事件を追う内に彼に心惹かれていく新聞社の雑誌記者（妻夫木聡）の話。記者が、本当は「あれは青春だった、革命は正義だ」って言いたいんだけど、「正義なら人を殺してもいいのか」みたいなのに悩まされるっていう展開。

学生運動をリアルタイムで知らないから何ともいえないけれども、最近は「今の時代に右も左も無い」みたいな風潮が強い様に感じられるんだけど、それもどうなのかなって思うな。「ノンポリ」というポリシーではなく、ただの無知とか無関心な人が多い気がするし。そういう奴のほうが、なんかあるとすぐにしょうもないカルトに嵌ったり、一途な社畜になるんじゃないかなあと思うんだ。

無宗教な上に無思想、その上「無難に、足並み揃えて」が大好きとくれば、そりゃ「お前、何なの？」って思うよ。かくいう私は何なんだろう。さしずめ「快樂主義者」「アナーキスト」「無頼派」とでもしておこう。

・『SUPER 8』

「少年時代」＋「SF」な映画だった。ヒロインの女優は可愛かったな。が、映画としてはどうもイマイチ。「ハリウッドです！」みたいな映画。ポップコーンとコーラが似合う映画だな。同じ「映画好き少年」系の映画なら『リトル・ランボーズ』の方がお勧め。

・『クライマーズ・ハイ』

日航ジャンボ墜落事件をモチーフにした、地方新聞社の記者たちの話。県警キャップ役の堺雅人の演技がいい。他紙との争いならまだしも、社内の記者同士の足の引っ張り合いがえげつなく、「お前らそんなことしてる場合じゃないだろ」と言いたくなる。で、監督は客にそう言わせなかったのだから、そういう意味ではいい映画なのだろう。主役の堤真一が非常にいまいちだったが、それ以外のキャストはかなり良かった、でんでん、いい味出してる。

・『猿の惑星 創世記』

友達と突っ込みを入れまくりながら、爆笑して見ていた。ストーリー的にも、科学的にも、非常に雑な造りの映画。間違い探しの感覚で見れば楽しめる。主人公の猿が、赤ちゃんの時はめっちゃ可愛いのに、いきなり月日が流れて邪悪極まりないでたちに変貌したり、といちいちウケる。

- y o u t u b e -

・森達也

『1999年のよだかの星』

動物実験の実態を追ったドキュメンタリー。医療、薬品、化粧品、栄養ドリンク、化学物質を使ったあらゆる製品が世に出るまでには動物実験が行われている。ただ、その現場や実態はまるで隠されているかの様にすっぽりと抜け落ち、一般人の目の届かない所に追いやられている。何故隠されているのかと言えば、僕たち一人ひとりが「見たくない」と思うから、目を背けているからだと思う。要するにいいところ取りしているのだ。文明の便利さだけを享受し、その代償には知らんぷり。

この構図は何かと似ている。そう、原発。東電許すまじ、みたいな感じで憤っているけれど、その原発の電気を享受してきた自分たちの今後の生活そのものから考えるべきだと思う。

また、原発に限らず、あらゆる所で類似した構造が見受けられる。と蓄解体業務従事者への差別だってそうだと思う。僕たちは肉を食っている以上は、動物を殺すことは避けられないということを受け入れるべきなのだ。可哀想、酷いと思うならば、肉を食うべきじゃない。少なくとも、自分自身がその「酷い」事に加担しているのだという意識を持つべきなのだ。

これらの「自分と切り離して考える癖」は文明人の心理の根本に巣食う病理だ。動物実験は「可哀想」と思うのではなく、「僕が殺しているんだ、さあどうする」と考えるべきなんだ。

とまでは森氏は言っていないけど、この映像を見て僕はそういう風に感じた。「で、どうするのか」と言われれば、この文明の利便性を放棄することは難しいだろうから、自分は「罪人だ」と自覚して、片時も忘れないように努めながら生きていくしかない。

『放送禁止歌～歌っているのは誰？規制しているのは誰～』

「テレビやラジオで放送されることが禁止されている」とされている歌、いわゆる「放送禁止歌」と呼ばれる歌が、実際は誰も禁止していないという事を明らかにしたドキュメンタリー。では実際には何故放送されないのかといえば、それはメディアが「自主規制」しているに過ぎないのだそうだ。

この映像はテレビで放送されたのだが、自主規制しているメディア自身が自分の問題に言及するというメタ構造になっていて、その皮肉なメタ構造が成立していること自体も面白い。あと、根本敬とかがやっていた「幻の名盤解放同盟」という珍しいレコードをめぐる事が趣旨の団体があって、そこが出したレコードが抗議されたこととかも取り上げられていた。まさかの根本敬出演に俺狂喜。

メディアの自主規制問題については小林よしのりなんかも取り上げているよね。メディアはなんで萎縮し、自主規制してしまうのか。「別に数字が取れるわけでもないし、ぐちゃぐちゃ言われるのは面倒くさいし、わざわざやる必要も無いか」みたいな感覚なんじゃないかな、と僕は思う。

- 雑誌記事 -

・カンパニー松尾

『カンパニー松尾のAV新時代 第34、35回 「還暦を撮る理由」』

出典 週刊プレイボーイ第47巻第8、9号

就職活動で集英社を受験するにあたり、週刊プレイボーイを読み始めて、伝説のハメ撮り監督「カンパニー松尾」の連載があることを知った。履歴書で僕を切ってくれた集英社さんだが、許す。他の出版社は許さなくても、集英社さんだけは許す。そして、今後も週プレは買い続ける、カンパニー松尾が書き続けるかぎり。

カンパニー松尾がAVに関する文章を書いている、それだけでお宝物なのだ。彼を知らない人のために少し説明する。

現在「ハマジム」というAVメーカーの社長でもある彼は、AVのジャンルの一つである「ハメ撮り」の祖であり、AVの歴史に名を刻む男である。そして、これは僕個人の見解であるがAVに「ドキュメンタリー」の要素を持ち込むことで、「ただ抜くためのズリネタ」としてだけではない、「作品」としてのAVの可能性を提示したAV監督の一人なのである。彼がいなければ、間違いなく現在のAV界はない。生ける伝説なのである。

かく言う僕がAVの深みを知ることになったのも、彼の作品『テレクラキャノンボール2009 賞品はまり子*Gカップ』を見たことがきっかけだ。

そして、今回取り上げた「還暦を撮る理由」という二回続きの文章には、さらに重大な要素が二つ含まれている。これからその理由を説明していくが、その二つの要素によって、この文章はAV研究における資料としてこれ以上ない程に貴重なものとなっている。

要素の一つ目は、この文章のメインテーマでもある「足立かおる」についての言及。この文章ではカンパニー松尾監督が足立かおる監督の還暦の誕生日パーティーを企画し、そこでビデオカメラを回し足立監督のドキュメンタリーを撮り始めた様子が綴られている。

本文でカンパニー松尾自身が書いているが、足立かおる監督はAVの歴史におけるもっとも重要なキーパーソンの一人なのである。代々木忠監督や村西とおる監督と肩を並べるAVの創設者、言ってみれば第一世代の一人なのである。そして、死体とウンコを撮り続けてきた異色のAV監督である。AV第二世代といえるカンパニー松雄監督は足立監督率いる鬼畜AVメーカー「V&Rプランニング」の初期メンバーであり、言ってみれば直系の弟子にあたるのだろう。

しかしながら、足立監督はその歴史的重要性に比して、作品の過激さゆえか代々木、村西両監督と比べて評価、知名度が低い。実に残念なことである。

足立監督の正当な評価なくして、AVの歴史を正しく理解することはできないだろうし、それはAVそのものの社会的な認知にも直結することだと思う。そして、作品としての、映像表現としてのAVの可能性を真剣に検討することは、今後の文化の新しい可能性を考える上で非常に重要なポイントだと、僕は常々考えているし、前々から述べ続けている。

これらの意味からも、カンパニー松尾監督が撮った、足立監督のドキュメンタリーの映像作品化を強く望む。これは、日本文化全体に影響を与えかねない、というか日本文化全体が影響を受けるべき「事件」なのだ。

で、要素の二つ目。それは、「バクシーシ山下」への言及である。本誌において度々その重要性を解いてきたバクシーシ山下監督であるが、なんと彼が今回の誕生日パーティーに参加していたということが書かれている。バクシーシ山下監督もV&Rプランニングの初期メンバーであるから、まあ妥当な流れなのではあるが。最近あまり音沙汰のなかったバクシーシ山下監督の近況

が知れたという意味で、この文章は非常に重要だったのだ。そして、足立監督とバクシーシ監督の誕生日が同じだという情報まで書かれている。

ここまで書いてきて、分かっていたかと思うがA Vについて考える上で、V & Rプランニング一派というのは最重要項目なのである。しかし、その中核をなす3人のうち、カンパニー松尾監督以外の二人の監督はすっかり社会、業界の表舞台からは干されてしまっているのである。迅速に再評価しなければ、業界、ひいては社会、文化への損失は計り知れない。

そんな思いをカンパニー松尾監督も抱いているのではないかと僕は思う。だからこそ、足立監督のドキュメンタリーを撮り、自身の連載で二人を取り上げ、紹介しているのだろう。繰り返しになるが三人の中で最メジャーであるカンパニー松尾監督が今回の記事で果たした役割は非常に大きい。

- A V -

・『エネマ・マニア』

レーベル ドグマ

監督 とっちん

出演 沢井真帆、長瀬あずさ

アナルもの。糞が好きなわけではないし、一年程前にいかがわしいお店でアナルバイブを体験した時は激痛のあまりに即効で中止してもらったし、内視鏡検査をした時は「こんな思いをするなら病気で死んだほうがいい」と思った僕ではあるが、ことA Vに関しては、結構アナルものが好きだ。単純に作品としての質が高いものが多いように思われるからだ。「アナルプレイ」が障壁として働き、監督や演者に一定の質を求めるからじゃないかと思う。具体的には、映像に緊張感が出るというか、女優も普段からそうしょっちゅうアナルプレイをしている奴は少ないだろうから、マンネリ感や作業感が無くなる。

この作品も導入部の会話とか、プレイ中の監督のしゃべりとかが面白かった。しかも、レーベルの作品紹介映像にカンパニー松尾監督作品があって、この作品の質の高さもうなずけるものがあった。

近くのビデオ屋で500円で買ったものだったから掘り出し物。

本誌執筆陣のプロフィール。

・オパーリン

1988年生（24歳）。大学二年生の時、女にフられてばかりの学生生活に嫌気がさし、自分に都合のいいことしか起きない国を作りたいと思う様になり「王国構想」を計画し、勝手に「オパーリン王国」を創り独立。本誌『月刊 オパーリン王国』も「王国構想」の一環である。

また、アマチュア小説家としても活動しており、過去3度「筑波学生文芸賞」に作品を投稿するも全て落選。「世の中が俺に追い付いていない」と負け惜しむ日々を送っている。過去の作品は電子書籍サイト「パブー」で電子化されており、無料で読むことが出来る。

・東町健太

たぶん1987年生まれ（24歳）。僕（以降、オパ）が4月生まれであるのに対して、彼は3月生まれなので学年は2つ上である。オパが記事に添えてプロフィールを書いてくれと頼んだところ「お前が適当に書いといてくれ」と断られたので、オパが知りうる限りの事を書いていきます。

大学（文学部？）を中退後、ブラックな印刷会社で働くなど、身体を張った「文学」を行っている。

オパとはかれこれ3、4年の付き合いになるだろうか。オパに文学と風俗のイロハを教える。オパが東京に帰省する度に会い、一緒に東京の町を散策する。

現在は週刊漫画を印刷している工場で単調かつ過酷な労働を強いられている。本人いわく「脳が溶ける」そうだ。最近では昇進し、色々やる様になってきたそうです。

・多良鼓

多良鼓

1988年生まれ。熊本出身。PNは大学入学時に付けられたあだ名から。大学では長ラン着でギャーギャー騒いだりサイリウム持ってハイハイフッフーしてました。可もなく不可もない平凡な人間ですが、出会う人に関しては運が良い方だと思っています。ここでも縁在って、文章を書くという珍しい機会を授かりました。文章力の鍛錬を目的に、毎月一稿書かせて頂いています。鍛錬に付き合わされている形で申し訳無く思いますが、もしお気に召めましたのであれば、来月も是非お付き合いして下さいますれば恐悦至極でございます。

・弦楽器イルカ

よく知らない人。気づいたら記事が掲載されていた。とりあえず隅っこに寄せて、少し泳がせてみることにする。

・鶴首

1988年、群馬県生まれ。小さい頃は悪戯少年であったが、中学生時代に音楽の美しさを実感して以来、「音楽は恋人」といった独特のエロスを持ち、自分で音楽を創造しないながらもしばらく音楽以外の友人の少ない学生生活を送る。女性から逃げるように男子校に進学し、高校時代は宇宙物理学や環境倫理学に思いを馳せ、あらゆるものの数式化を試みるが、やがて限界を感じ、不確定な生命科学への道を選ぶようになる。しかし、大学でまたしても学問の限界を痛感し、その反動で、売れない「破滅的な音楽」、「不安定な音楽」にも興味を持って深く追求するようになり、やがて音楽からの影響で諸行無常な世に美を見出すようになる。そんな中、月刊オペリン王国の存在を知り、「王国構想」に感銘を受けたため執筆に至った。

2012年3月、『月刊オパーリン王国』は創刊から半年が経ったが、日本においての3月は何といっても東日本大震災から一年が経過したということ意識する月だったのだろう。あれから一年、何が変わったのか、何も変わらなかったのか、この国は少しでも前に進むことができたのか。色々な人が色々と発言していた。別に有名人に限ったことではなく、日本に住んでいるあまねく人々がその胸の内で考え、時には発言し、話し合ったのだろう。

みんながそれぞれいろんなことを考える中で、みんなの考えが一致することなどありえない。そんな中で何かが決まり、実行される為には、当然その過程である意見が切り捨てられる。集約可能な意見もあろうが、真っ向から対立する事案についてはどちらかを選択しなければならない。選択には犠牲が伴う、当然のことではあるが、その当然のことをから目を背けて良い所だけしか見ないで変化を求めるのも嫌だし、行動の犠牲を恐れて何もせずにいるのも嫌だ。

あの悪名高き菅総理は就任当時、「最少不幸社会」というスローガンを掲げていた。幸福は定量化が難しいけれど、不幸の要因は比較的に共通しているからそれを減らしていこう、という考え方だったと思う。いい言葉だなと思っていたのだが、ちっとも実行されぬままに終わってしまった。「じゃあ、お前がやってみろ」と言われたら、当然自分にも無理だろうと思う。菅総理に限らず、野田総理でもいいのだが、今の国政を見ていると「大変だろうな」と思う。全くもって無理ゲー極まりないのだから。どんな所が無理げ一なのかといえば、何をしても誰かしらが文句を言うところである。文句をいちいち真に受けてその通りにしていたら、あっち行ったりこっち来たり、何も決まらないんだろうな。

何が言いたいかというと、話し合いは急いで何かを決めなくちゃいけないことには向かないということだ。そして、お人好しじゃ何も決められないということだ。

とそんな風にダラダラと色んなことを考えながら、「でも俺が何か言ったところで、何も変わりやしない、というか物事は自分とは全く無関係なところで決まっていくのだしなあ」と思い、「それでも、だからと言って黙って、されるがままになっているのも癪だしなあ」とも思った。そんな気分の中で今月号を書いていた。

『僕たちは世界を変えることができない』。銀杏BOYZのドキュメントDVDのタイトル。これは殆どの人が抱える普遍の心理だと思う。で、この心理を下敷きにして「だからもうどうでもいいや」と思うか、「でも、何かやらかしてみたいんだ」と思うか、これは人によって分かれるところだと思う。そして一人の人間の心の中でも時と場合によって、行ったり来たりするんだと思う。

僕は今、断然「それでもやらかしたい派」な気分だ。だからこそ、馬鹿みたいな時間を割いてこんなものを書いているんだと思う。本当は「国がどうのこうの」なんかどうでも良くて、自分がこの先どうなるのか分からなくて、野垂れ死んでしまう気しかなくて、怖くて仕方が無い。でも書く、だから書く、恐怖に駆り立てられて。

「こんなもん、お前のオナニーだろ。」面と向かって僕にそう言ってくれる人はいないが、僕自身が自分にそう言って、僕をなじり続けている。「ああ、そうさ。上等だよ。」精一杯強がって、僕はなじる俺にそう言って、言い返している。

なんだか湿っぽくしてしまって申し訳ないが、メ（しめ）だけに大目に見て欲しい。いかがだっただろうか、月オパ3月号。読んでくれてありがとう。そして、記事を書いてくれた4人の執筆者のみなさんにもありがとう。

ウジウジと書いていたら何だかスッキリして「よーし来月は何を書こうかな」という気分になってきた。まさにオナニーの効能である。スッキリしたいから書く、それも書くモチベーションの一つだと思う。読んだ人がスッキリするかどうかは知らないけどさ。でも考えてみたら、書くことがオナニーなら、読む人は顔射されているようなものだなあ。読書好きな人はある意味で顔射されるのが好きなドMなのかもしれない。ガハハ、下世話ですいません。

最後に、今後の予告を少し。今、パブーで知り合った数人の作家さん達と新しい企画の準備を進めている。いまいちラストがスッキリしなかった小説の結末を勝手に書き換えてしまおう、でその書き換えたものを勝手に表彰してしまおう、というなんとも無謀な企画である。楽しみにしておいてもらって構わない。

ではまた来月、顔射されてください。さよなら！

(2012年3月28日)

「月刊 オパーリン王国」では「はばからない」をコンセプトに、「何か、何でもいいから、とにかく主張したいんだ」という方に対して紙面を提供したいと考えています。少しでも思い当たる節のある方は是非、記事を投稿してください。送り先は、

[Kuukiyomimasenn0409@gmail.com](mailto:kuukiyomimasenn0409@gmail.com)

まで。

本文、形式、筆名、簡単、筆者略歴を添えて送りください。お待ちしております。（国王 オパーリン）

「月オパ」のバックナンバーは電子書籍サイト「パブー」で読むことができます。

<http://p.booklog.jp/users/opaarinn>

—2012年3月29日発行—

編集・発行人 オパーリン

今日で24歳になった。「無為徒食のまま、ヌクヌクと生きながらえ、こんな僕でごめんなさい。」と母親に言った。そんなことを言って親不孝を恥じる気持ちが少しでもあるのならば、もう少しシャンと生きろ、という話である。僕もそう思う。実際、シャンとしようと思って世に言う「シューカツ」なんぞというものにもチャレンジしておるんだが。どうにも、この性根に染み付いた怠惰な姿勢は、僕の毛穴から滲み出て、何となく禍々しい臭気を発しているらしい。取り繕っても本人のあずかり知らぬところでボロが出ているらしい。「お祈り」されまくりである。

焦っている自分がいる。がしかしもう片方で、微塵も動揺せず「ああ、やっぱりな。やっぱり俺は天才だったんだああああ！！ざまあ見やがれ！」と狂喜している自分がいる。そんな自分を冷静に見据え「もう、末期症状だな。」と匙を投げる自分もいる。

「論理的整合性」。それは何か物事を考えるとき、そして文字を書くとき、一般的に最も重要視すべきとされているものではないだろうか。僕は最近、どうもそれが煩わしい。考えるにしても、書くにしても。そんなものを飛び越えた先にあるもの、それをものにしたい、そう思う。例えば、文章を書いていると、読者に伝えるためには当然自分の考えを「説明」する必要がある。というよりは、「説明すること」自体が「文章を書くこと」である場合が大半である。しかし、その「説明」だけにとらわれていると、何か見落としてしまっているような、つまり「本当はあんまり説明しなくても、というより説明しないことによってより良く伝わる、そんな方法があるんじゃないか」というようなことを思うのだ。

何が言いたいかというと、「最近の俺の文章はどうも覇気がない、いや、無くはない。が、もっと覇気を発散するような書き方があるんじゃないか」ということだ。だからね、今これを読んでいるあなたと僕の間には紙面なりディスプレイなり、絶対に超えられない薄皮があるわけじゃない、コンドーム的な感じで。だからね、僕はそのコンドームを突き破ってあなたを孕ませる様な、そんな文章が書きたいと思っているわけですよ。 そんな気概で、これからその方法を模索していこうと思っています。どうすればいいのか、何となく掴みかけているような、でも上手く言えない。そのこと自体が鍵なんじゃないか、とあたりをつけているのが現状。

と、そんな感じです。最後まで読んでくれてありがとう。じゃあ、また。

(2012年4月9日)

月刊 オパーリン王国 2012年 3月号

<http://p.booklog.jp/book/48134>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48134>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48134>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.